

現代の日展作家たち — 日本の美

2023

*NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan*



宮田亮平「シュブリンゲン23-2」2023年 第10回日展

## 三〇〇〇点の 作品群のなかから あなたの「美の宝物」を 探しあてていただきたい



「シュプリングエン22-2」2022年 第9回 日展

今年も十一月三日文化の日より、国立新美術館にて、秋の日展を開催いたします。二〇一四年に日展の大きな改革を行いましたから、今年は十回目という節目の年になります。これを機に、ご来場いただく皆様にさらに寄り添った展示を行っていきたく考えております。

日展は、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門からなり、毎年全国から一萬点を超すご応募をいただき、出品作家は十代から百歳までと幅広く、入選者と会員などの作品を併せて、約三〇〇〇点の新作を展示しております。

この作品群のなかから、ぜひ、会場で皆様に「美の宝物」を探していただきたいと思っております。心に共鳴する作品が必ずみつかるはずで、新たな作家を発見し、その作家が次はどういう作品を作るのか、また次の年も期待していただけたらと思います。日展には、過去一五年というすばらしい歴史があります。その作家の若い頃の作品はどうだったのだろう。過去の偉大な作家たちの作品はどうだったのだろう。人に歴史ありといいますが、そういうことを探求する場であってもよいのかなと思っております。毎年、新作が一堂に並ぶ会場で、新鮮な作品をご覧いただくことができますが、その背景に日展一五年の過去を振り返ることができます。それが日展の大きな特徴と感じています。また、昨年はこのような作品だったけれど、今年はまた一つ大きな展開があるな、というように楽しんでいただけるそれは出品している作家自身がそうです。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門の作家が、それ

ぞれの専門外の作品からヒントを得て自らの作品に生かすことも多々あります。それぞれの作家の探求心が必ず作品の中に現れているので、それを探し当てるといふ面白さも、この日展の中にはあります。ぜひそれを感じていただけましたら幸いです。

今年の日展は、第十回を記念しまして、高校・大学生を無料とさせて頂いた、若い方々のご来場を歓迎します。若い方々は、伸び盛りですからいろいろなもの吸収し、また同時にさまざまな悩みを抱えています。そうした悩みを解きほぐすきっかけになったり、日展の作品から何かヒントを得ることもできると思います。三〇〇〇点の作品群をご覧になるうちに、自分を探し当ててみたり、人間というものをも再発見できるような、そんな場所であると思っております。

日展はこのように、「宝の山」だと自負しております。どうぞ、ご自分の一番好きな美の宝物を探しにいらしてください。私は「面白い日展、明るい日展、楽しい日展、みんなの日展」をめざしています。日展が皆様にとって夢のある楽しめる世界であっていただきたい。今を感じ、未来を意識できる作品を多く生み出し、発表していきたいと思っております。ぜひ多くの皆様に高覧いただき、今後も皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

公益社団法人日展

理事長 宮田 亮平



もくじ

日展の顧問・理事・監事・会員紹介

インタビュー

日本画

渡辺信喜

自然との触れ合いの中で今年の花を描く

16

洋画

町田博文

ヨーロッパの風景を背景に、人物を描く

20

彫刻

池川直

イメージをデッサン。塑像、石彫、木彫で表現

24

工芸美術

春山文典

アルミニウムの無機質にこだわる

28

書

真神巍堂

作家ではなく職人であれ

32

日本画

古澤洋子

山の風景から時の堆積や地層、宇宙へ

36

洋画

錦織重治

山に登り、誰も見たことのない景色を描く

40

彫刻

丸田多賀美

身近な人物をモデルに、その内面を表現

44

工芸美術

井隼慶人

自然への想いを蠟染にたくす

48

書

深瀬裕之

歴史を背景にした万葉の歌を書く

52

中・高生対談

理事長と語ろう！「芸術の力」

56

日展開催概要と会期中のイベント

64





洋画 副理事長  
さとう てつ  
佐藤 哲

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、東光会理事長。



洋画 理事  
ゆやま としひさ  
湯山 俊久

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1980年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure (ラリュール)」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「l'Aube (夜明け)」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



洋画 理事  
こなだ いっき  
小灘 一紀

1944年、鳥取県生まれ。芝田米三、大島士一に師事。1967年、金沢美術工芸大学卒業。1973年、第5回日展初入選。1992年、第24回日展「窓辺」により特選受賞。1995年、第27回日展「横たわる」により特選受賞。2002年、第34回日展「めざめ」により日展会員賞受賞。2017年、改組 新 第4回日展「伊須気余理比売」により内閣総理大臣賞受賞。2023年、第9回日展出品作「伊邪那岐命の悲しみ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日洋会理事長。



洋画 理事  
さいとう ひでお  
斎藤 秀夫

1943年、福島県生まれ。伊藤清永に師事。1966年、中央大学卒業。1978年、第10回日展初入選。1991年、第23回日展「午後のひととき」により特選受賞。1993年、第25回日展「ショールの婦人」により特選受賞。2019年、改組 新 第6回日展「清新」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事。



日本画 理事  
わたなべ のぶよし  
渡辺 信喜

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。



洋画 顧問  
なかやま ただひこ  
中山 忠彦

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。2019年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、白日会会長。



洋画 顧問  
てらさか たかお  
寺坂 公雄

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。2020年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、山梨大学名誉教授。



洋画 顧問  
ふじもり かねあき  
藤森 兼明

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレクション パンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレクション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレクションサンピターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長。



日本画 副理事長  
つちや れいいち  
土屋 禮一

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。



日本画 理事  
ふくだ せんけい  
福田 千恵

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアノリスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



日本画 理事  
やまざき たかお  
山崎 隆夫

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海煌」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



日本画 理事  
むらい まさゆき  
村居 正之

1947年、京都府生まれ。池田透邨に師事。1968年、画塾・青塔社へ入会。1971年、第3回日展初入選。1975年、第7回日展「赤い陸橋」により特選受賞。1990年、第22回日展「サンマルタン運河」により特選受賞。2018年、改組 新 第5回日展「暮れゆく時」により文部科学大臣賞受賞。2000年、紺綬褒章受章。2020年、改組 新 第3回日展出品作「日照」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、大阪芸術大学教授。

日展の顧問・理事・監事紹介

(2023年9月1日現在)



工芸美術 顧問  
おおひ としろう  
大樋 年朗

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校(現・東京藝術大学)工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展『『風寒し』青釉花器』により北斗賞受賞。1957年、第13回日展『『鶉』緑釉壺』により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展『釉彩『魚紋』花器』により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展『『歩いた道』花器』により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作『『峙つ』花三島飾壺』により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



工芸美術 顧問  
なか い ていじ  
中井 貞次

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展『集積』により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展『間の実在』により特選受賞。1990年、第22回日展『巨木積雪』により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作『原生雨林』により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。2022年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



工芸美術 顧問  
もりの たいけい  
森野 泰明

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展『青釉花器』により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展『花器『藍』』により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作『扁壺『大地』』により日本芸術院賞受賞。2019年、旭日中綬章受章。2021年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



工芸美術 理事  
はるやま ふみのり  
春山 文典

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展『四角柱イン・セクション』により特選受賞。1984年、第16回日展『無限標』により特選受賞。2000年、第32回日展『風の門』により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学(現・横浜美術大学)学長。2016年、改組新第2回日展出品作『宙の河』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、横浜美術大学名誉教授。



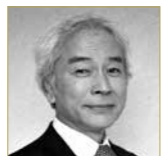
彫刻 理事  
やまだ ともひこ  
山田 朝彦

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展『雄』により特選受賞。1990年、第22回日展『若人』により特選受賞。2012年、第44回日展『こもれび』により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組新第2回日展出品作『朝の響き』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長。



彫刻 理事  
みやせ とみゆき  
宮瀬 富之

1941年、京都府生まれ。松田尚之に師事。1968年、金沢美術工芸大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1973年、第5回日展『風によそおい』により特選受賞。1974年、第6回日展『風の中を』により無鑑査・特選受賞。2005年、第37回日展『はんなりと石庭に』により内閣総理大臣賞受賞。2009年、第40回日展出品作『源氏物語絵巻に想う』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



彫刻 監事  
いけがわ すなお  
池川 直

1958年、香川県生まれ。1983年、筑波大学大学院芸術研究科修了。同年、第15回日展初入選。1994年、第26回日展『道』により特選受賞。1996年、第28回日展『もう一人の私』により特選受賞。2017年、改組新第4回日展『エルスルク 古代の記憶』により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組新第5回日展出品作『時の旅人』により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事、鹿児島大学教育学部教授。



工芸美術 顧問  
おくだ きよこ  
奥田 小由女

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展『或るページ』により特選受賞。1974年、第6回日展『風』により特選受賞。1988年、第20回日展『海の詩』により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作『炎心』により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。2020年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。



彫刻 顧問  
ひら た じろう  
蛭田 二郎

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展『ひとり』により特選受賞。1967年、第10回日展『女』により特選受賞。1968年、第11回日展『女'68』により菊華賞受賞。1996年、第28回日展『告知』により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作『告知-2001-』により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。2018年旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。



彫刻 理事  
のうじま せいじ  
能島 征二

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展『窮』により特選受賞。1971年、第3回日展『省』により特選受賞。1990年、第22回日展『五月の女』により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展『悠久の時』により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作『慈愛-こもれび』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



彫刻 理事  
やまもと しんすけ  
山本 眞輔

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学(現・筑波大学)教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展『生きがい』により特選受賞。1980年、第12回日展『ひたむき』により特選受賞。1992年、第24回日展『いい日』により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展『森からの声』により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作『生生流転』により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。



彫刻 副理事長 事務局長  
かんべ みつひろ  
神戸 峰男

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展『裸婦』により特選受賞。1978年、第10回日展『裸婦』により特選受賞。2006年、第38回日展『長風』により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作『朝』により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、事務局長、日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授。



洋画 理事  
まちだ ひろふみ  
町田 博文

1953年、茨城県生まれ。寺島龍一に師事。1976年、茨城大学卒業。1982年、第14回日展初入選。2000年、第32回日展『雪の朝』により特選受賞。2003年、第35回日展『新雪の麓』により特選受賞。2018年、改組新第5回日展『新雪の河畔』により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事。



洋画 監事  
なんば しげる  
難波 滋

1944年、岡山県生まれ。柚木祥吉郎、三宅幹一郎に師事。1997年、第29回日展初入選。2000年、第32回日展『哀華遺選』により特選受賞。2001年、第33回日展『遺選・たちねの…』により特選受賞。2005年、第37回日展『遺選・水無月』により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展『遺選・十六夜』により文部科学大臣賞受賞。現在、日展監事。



彫刻 顧問  
なかむら しんや  
中村 晋也

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展『華の譜』により特選受賞。1968年、第11回日展『想華の詞』により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展『宴の華』により菊花賞受賞。1981年、第13回日展『星のいのり』により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展『焦躁の旅路』により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作『朝の祈り』により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。



彫刻 顧問  
かわさき ひろてる  
川崎 普照

1931年、東京都生まれ。斎藤素巖、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展『暖流』により特選受賞。1993年、第25回日展『未来への讃歌』により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作『大地』により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。





書 理事  
ほし こうどう  
星 弘道

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩 贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



書 理事  
つち はし やすこ  
土橋 靖子

1956年、千葉県生まれ。日比野五鳳、日比野光鳳に師事。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科（書道）修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「夕されば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。



書 理事  
まがみ ぎ どう  
真神 巍堂

1943年、京都府生まれ。村上三島に師事。1967年、京都教育大学美術科書道卒業。1968年、第11回日展初入選。1992年、第24回日展「五嶺」により特選受賞。1996年、第28回日展「舒位詩」により特選受賞。2009年、第41回日展「于謙詩」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展「轆轤」により東京都知事賞受賞。2017年、改組 新 第4回日展「碧澗」により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組 新 第4回日展出品作「碧澗」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



書 監事  
うしくぼ ごじゅう  
牛窪 悟十

1945年、埼玉県生まれ。西川 寧、小林斗盞に師事。1979年、東京教育大学（現・筑波大学）卒業。1977年、第9回日展初入選。1996年、第28回日展「杜甫詩」により特選受賞。1998年、第30回日展「李白詩・送殷淑」により特選受賞。2019年、改組 新 第6回日展「岑參詩」により文部科学大臣賞受賞。2022年、第8回日展出品作「陸游詩」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。



書 顧問  
いしげ けいどう  
井茂 圭洞

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学（現・京都教育大学）美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。2018年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。



書 顧問  
おざき ゆうほう  
尾崎 邑鵬

1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・苞竹賞受賞。1970年、第2回日展「高青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



書 副理事長  
くろだ けんいち  
黒田 賢一

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。



書 理事  
たかき せいりゅう  
高木 聖雨

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。1973年、大東文化大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1989年、第21回日展「天馬」により特選受賞。1993年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。2015年、改組 新 第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、謙慎書道会理事長、全国書美術振興会理事長、大東文化大学名誉教授。



工芸美術 理事長  
みやた りょうへい  
宮田 亮平

1945年、新潟県生まれ。1970年、東京藝術大学美術学部工芸科卒業、同年、第2回日展初入選。1972年、東京藝術大学大学院美術研究科工芸（銀金）専攻修了。1981年、第13回日展「ゲルからの移行『8』」により特選受賞。1997年、第29回日展「ばーるんぐ」により特選受賞。2005年、東京藝術大学学長。2009年、第41回日展「シュプリングエン『悠』」により内閣総理大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「シュプリングエン『翔』」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化庁長官。現在、日展理事長、日本芸術院会員、東京藝術大学名誉教授・顧問、国立工芸館・顧問。



工芸美術 理事  
よし か はたお  
吉賀 將夫

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩袖広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩袖広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、山口大学名誉教授、萩陶芸美術館・吉賀大眉記念館理事長。



工芸美術 理事  
み た む ら あ り す み  
三田村 有純

1949年、東京都生まれ。祖父の三田村自芳、父の三田村秀芳、高橋節郎、田口善国に師事。1973年、東京学芸大学教育学部美術科（工芸専攻）卒業。同年、第5回日展初入選。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科（漆芸専攻）修了。1985年、第17回日展「ピラミス・遙か天空に」により特選受賞。1988年、第20回日展「ピラミス・嵩峻」により特選受賞。2014年、改組 新 第1回日展「炎立つ」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展「月の光 その先に」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「月の光 その先に」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、東京藝術大学名誉教授。



工芸美術 理事  
い は や けい じん  
井隼 慶人

1941年、京都府生まれ。小合友之助、佐野猛夫、三浦景生に師事。1967年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）工芸科染織専攻科修了。1979年、第11回日展初入選。1987年、第19回日展「山気」により特選受賞。1993年、第25回日展「静韻」により特選受賞。2016年、改組 新 第3回日展「春のゆく」により日展会員賞受賞。2019年、改組 新 第6回日展「積日惜夏」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事、京都市立芸術大学名誉教授。

松田 茂  
松野 行  
松本貴子  
丸山 勉  
三沢 忠  
三原捷宏  
守長雄喜  
守屋順吉  
安増千枝子  
柳瀬俊泰  
山田郁子  
吉崎道治  
李 曉剛  
和田 貢  
渡邊 明  
渡辺啓輔  
渡辺雄彦  
渡邊裕公

田中里奈  
田辺知治  
高梨芳実  
竹留一夫  
竹久秀樹  
立花 博  
寺久保文宣  
土井原崇浩  
歳嶋洋一朗  
中川澄子  
永田英右  
檜崎重視  
成田禎介  
西田伸一  
西田陽二  
西谷之男  
西房浩二  
西山松生  
錦織重治  
橋本一貫  
長谷川 仵  
濱本久雄  
日野 功  
平野行雄  
武藤初雄  
福井欧夏  
福島隆壽  
福田あさ子  
星川登美子  
前田 潤  
前原喜好  
松下久信

岡田征彦  
岡本 猛  
加藤寛美  
鍵主恭夫  
片岡世喜  
金山桂子  
茅野吉孝  
木原和敏  
菊池元男  
北本雅己  
桐生照子  
久保博孝  
工藤和男  
熊谷有展  
倉林愛二郎  
栗原高光  
桑原富一  
小関修一  
小牧 幹  
古賀英治  
児島新太郎  
児玉健二  
佐藤祐治  
佐藤龍人  
阪脇郁子  
櫻田久美  
清水 優  
杉山吉伸  
鈴木順一  
鈴木 實  
曾 劍雄

**洋画**  
(111名)  
  
中山忠彦  
寺坂公雄  
藤森兼明  
佐藤 哲  
湯山俊久  
小灘一紀  
斎藤秀夫  
町田博文  
難波 滋  
青島紀三雄  
浅見文紀  
天野富美男  
井上 武  
伊藤晴子  
飯泉俊夫  
池田清明  
池田良則  
池山阿有  
石田宗之  
磯崎俊光  
一の瀬 洋  
稲葉徹應  
遠藤原三  
小川尊一  
小川満章  
大竹正治  
大友義博  
大瀨繁樹  
大谷喜男

古澤洋子  
北斗一守  
本多功身  
間瀬静江  
曲子明良  
松浦丈子  
松崎十朗  
松崎良太  
丸山 勉  
三谷青子  
三輪晃久  
三輪敦子  
水野 收  
南 聡  
森 美樹  
森脇仁士  
諸星美喜  
安田敦夫  
山下邦雄  
山下保子  
山田 毅  
山本 隆  
由里本 出  
吉村卓司  
米倉正美  
米田 実  
米谷清和

那須勝哉  
中出信昭  
中村賢次  
中村 眞  
中村 徹  
中村文子  
仲島昭廣  
仲村良一  
成田 環  
丹羽貴子  
仁志出龍司  
新川美湖  
西田幸一郎  
西田真人  
野田夕希  
能島和明  
能島千明  
能島浜江  
袴田規知代  
橋本弘安  
橋本正弘  
長谷川雅也  
長谷川喜久  
濱田昇児  
林 和緒  
林 秀樹  
日影 圭  
平尾秀明  
平木孝志  
藤井範子  
藤島大千  
藤島博文

片山侑胤  
亀山祐介  
川崎麻児  
川崎鈴彦  
川島睦郎  
川嶋 涉  
川田恭子  
河村源三  
木村光宏  
菊池治子  
岸野圭作  
北村恵美子  
久米伴香  
桑野むつ子  
佐々木淳一  
佐々木 曜  
佐藤朱希  
佐藤俊介  
佐藤和歌子  
坂根克介  
坂本幸重  
土農 力  
田島奈須美  
田所 浩  
高田淑子  
高増暁子  
辰巳 寛  
谷川将樹  
手塚恒治  
寺島節朗  
戸田博子  
利光洋子

**日本画**  
(120名)  
  
土屋禮一  
福田千恵  
山崎隆夫  
村居正之  
渡辺信喜  
青木秀明  
朝倉隆文  
芦田裕昭  
荒木弘訓  
伊東正次  
池内璋美  
石井公男  
石田育代  
石原 進  
市原義之  
稲田重紀子  
岩田壮平  
鶴飼雅樹  
上田勝也  
内海 泰  
大豊世紀  
大西守博  
岡江 伸  
岡田繁憲  
岡村倫行  
岡本明久  
加藤 晋  
加藤 智  
鍵谷節子

# 日展会員

(2023年9月1日現在)

林 香君  
原 典生  
原 益夫  
藤田 仁  
古瀬政弘  
伯耆正一  
千田 浩  
本間秀昭  
前川正治  
前田和伸  
前田泰昭  
待田和宏  
南 正剛  
宮崎芳郎  
向井弘子  
向山伊保江  
村田好謙  
森田清照  
安田佳代  
山岸大成  
山崎輝子  
山元健司  
山本 清  
山本由紀子  
横山喜八郎  
吉水絹代  
若山裕昭  
渡辺洋子

角 康二  
曾根洋司  
田中照一  
田中紀子  
田中嘉生  
高岡由美子  
高津明美  
高名秀人光  
高橋貞夫  
高光一生  
竹森公男  
武腰一憲  
武腰冬樹  
立川善治  
谷口勇三  
谷野吉冬  
月岡裕二  
寺池静人  
得地秀生  
友定聖雄  
内藤英治  
中村武郎  
中村三喜雄  
並木恒延  
南雲 龍  
西片 正  
西川 實  
西本瑛泉  
西本直文  
西山邦彦  
橋本昇三  
早瀬郁恵

上森四郎  
小田謙二  
尾長 保  
大樋年雄  
加藤令吉  
司辻光男  
春日井路子  
勝 孝  
兼先恵子  
兼田文男  
叶 道夫  
亀井 勝  
川口 満  
川原和夫  
河合徳夫  
河野榮一  
木下五郎  
木谷陽子  
久保満義  
沓澤則雄  
栗本雅子  
桑原紀子  
小西啓介  
小林英夫  
厚東孝治  
佐々木達郎  
佐々木眞澄  
佐治ヒロシ  
佐藤好昭  
志観寺範從  
十二町 薫  
杉原外喜子

山瀬晋吾  
山田 進  
横山祐三  
吉居寛子  
吉岡 徹

### 工芸美術 (113名)

奥田小由女  
大樋年朗  
中井貞次  
森野泰明  
春山文典  
宮田亮平  
吉賀將夫  
三田村有純  
井隼慶人  
安藤タヅ子  
安藤 工  
相武常雄  
青木宏懂  
赤堀郁彦  
浅井啓介  
浅蔵與成  
飴村秀子  
有山長佑  
石川充宏  
磯野清夫  
上原利丸

野間口 泉  
野村光雄  
馬場正邦  
早川高師  
原田治展  
原田裕明  
東 誠  
一畝田 徹  
平戸司郎  
平原孝明  
廣川政和  
福本重喜  
二塚佳永子  
堀 龍太郎  
堀内有子  
堀内秀雄  
堀尾秀樹  
間島博徳  
前芝武史  
榎野仁一  
松岡高則  
松田裕康  
松田安生  
南川憲生  
宮坂慎司  
宮崎雅司  
宮里明人  
村井良樹  
村山 哲  
森 矢真人  
山崎茂樹  
山下 清

嶋畑 貢  
小代 猛  
白石恵里  
新澤博志  
鈴木紹陶武  
鈴木徹男  
清家 悟  
銭亀賢治  
田中厚好  
田畑 功  
田丸 稔  
大丸 敏  
高倉準一  
高野眞吾  
高橋 勇  
竹谷邦夫  
立山美次  
谷口淳一  
谷村俊英  
辻畑隆子  
堤 直美  
寺山三佳  
得能節朗  
徳安和博  
中口一也  
中辻 伸  
中原篤徳  
中村優子  
長岡 強  
成富 宏  
野島耕之介  
野原昌代

小野啓亘  
小比賀 強  
緒方信行  
桶本 寿  
親松英治  
加藤幸男  
加茂為男  
梶川俊一郎  
柏原花子  
片山博詞  
勝野眞言  
亀谷政代司  
川崎義昭  
川田良樹  
河村佳則  
木代喜司  
清島浩徳  
九後 稔  
久保 浩  
工藤 潔  
楠元香代子  
熊谷喜美子  
栗山賀行  
小島靖成  
紺谷 武  
佐藤隆男  
寒河江淳二  
齋藤尤鶴  
櫻井真理  
笹山幸徳  
柴田良貴  
島田見根夫

### 彫刻 (130名)

中村晋也  
川崎普照  
蛭田二郎  
能島征二  
山本眞輔  
神戸峰男  
山田朝彦  
宮瀬富之  
池川 直  
安藤孝洋  
阿部鉄太郎  
青山三郎  
井上周一郎  
伊庭照実  
伊庭靖二  
石黒光二  
石崎義弘  
石田陽介  
磯尾隆司  
宇治川久司  
宇津孝志  
上田ふみ  
上田久利  
上床利秋  
植田 努  
江藤 望  
江里敏明  
圓鏗元規  
小関良太



# 日展作家は語る

芸術とは何か

創作とは何か

森田彦七  
柳 濤雪  
山口耕雲  
山根互清  
山本高邨  
山本大悦  
山本悠雲  
横山煌平  
吉川蕉仙  
吉川美恵子  
吉澤石琥  
吉澤大淳  
吉澤鐵之  
吉澤劉石  
吉田成美  
吉見靖子  
和中簡堂  
綿引滔天

堂本雅人  
歳森芳樹  
内藤富卿  
内藤望山  
中川裕皓  
中路佳保里  
中野北溟  
中林露風  
中村伸夫  
永守蒼穹  
檜崎華祥  
新谷泰鵬  
西村自耕  
西村東軒  
野田杏苑  
野田正行  
原田 上  
日賀野 琢  
日比野博鳳  
平形精逸  
深瀬裕之  
福光幽石  
藤岡都逕  
舟尾圭碩  
前島泉洲  
松清秀仙  
宮崎葵光  
村上俄山  
望月和風  
森上光月  
森川星葉  
森嶋隆鳳

大平匡昭  
岡田直樹  
岡野楠亭  
加藤子華  
角元正燦  
梶山夏舟  
河西樸堂  
木村通子  
鬼頭翔雲  
杭迫柏樹  
倉橋奇艸  
近藤浩乎  
佐々木宏遠  
澤田虚遊  
師田久子  
師村妙石  
清水透石  
芝 松翠  
陣 軍陽  
鈴木春朝  
関 吾心  
関 正人  
田頭一舟  
田頭央泐  
田中節山  
田中徹夫  
高木厚人  
竹内勢雲  
樽本樹邨  
辻元邑園  
寺岡棠舟  
寺坂昌三

## 書 (111名)

井茂圭洞  
尾崎邑鵬  
黒田賢一  
高木聖雨  
星 弘道  
土橋靖子  
真神巍堂  
牛窪梧十  
赤江華城  
明石聰濤  
新井光風  
有岡郊崖  
井上清雅  
伊藤一翔  
伊藤仙游  
池田桂鳳  
石坂雅彦  
石田雲鶴  
石飛博光  
市澤静山  
今村桂山  
岩田海道  
岩永栖邨  
植松龍祥  
海野濤山  
遠藤 彊  
尾崎蒼石  
尾西正成  
大澤城山



# 渡辺信喜

京都市から西へ電車で三十分、亀岡市は、急流や峡谷を巡る川下りツアーで有名な保津川をはじめ、山と川、自然に恵まれた豊かな地である。日本画家の渡辺信喜さんは、京都市から亀岡に住まいを移して四十数年になる。自然のなかから花を中心としたモチーフを見つけ、その感動をもとに作品にしている。閑静な住宅地の家の庭には作品にも描かれている蓮の花や、牡丹などが大切に育てられている。日本画家としての軌跡を伺った。

## 代々続く仏画師の家に生まれて

渡辺さんは京都市下京区の西本願寺のそばで長男として生まれた。実家は先祖代々続く仏画師の家であり、四百年前の江戸時代にさかのぼれるという。先日、仏壇の奥から、家業を示すのれんがみつかったというので壁にかけてあった。「御繪所 渡辺」と藍染めで書かれている。仏画を描く絵所と表具をする表具所、併せて絵表所というそう。西本願寺派の寺に合わせてさまざまな大きさの仏画を描き、納める仕事で、池坊、田中伊雅などに次ぎ、京都で六番目に古い歴史ある「調進」の会社である。そうした伝統ある家業を手伝いながら、やがては会社を牽引しながら、渡辺さんは日本画家として歩んできた。

小学校に上がるころから高校までは、京都の中心部から少し離れた太秦に住んだ。周りは自然豊かな地で、いつも外で遊んでいたという。植物や昆虫に触れ合っていたこと、それが原体験となった。高校に入ると桂に移り、結婚されて京田辺、そして亀岡と住まいを移したが、目に入るのはいつも山や自然豊かな緑。小鳥の声。川も山もあり、自然と共生していたのだ。中学校では鶏小屋を自分で作って、鶏を育てた。植物や生き物を育てるのが何より好きだったのだ。それは現在の渡辺さんの日常でも変わらない。家の庭では好きな花を育て、訪れる燕の巣や、ヒヨドリやスズメ、メジロなどのためにさまざまな工夫がなされている。

中学校では美術クラブに入り、光風会の先生に学んだ。写生大会などで賞をもらったこともある。絵を描いていきたいと思うなか、父親の勧めで京都市立日吉ヶ丘高校の美術・工芸コース、日本画科に入った。その後、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）へ進む。大学のころから家業の手伝いもし、絹を張ったり、下準備などもしていた。「大学の授業では、一年はデスクワーク、二年は鳥と動物、三年で人物、四年で風景



「蓮」2021年 第8回 日展



**Profile**  
 (わたなべ のぶよし) 1941年、京都市生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、新日春会会員、京都精華大学名誉教授。

と担当が決まっていました。先生は、一年は榊原紫峰先生、猪原大華先生、二年で上村松篁先生、三年で秋野不矩先生、石本正先生、四年で奥村厚一先生とそうそうたる先生方で、小野竹喬先生が非常勤でいらしていました。すごく恵まれた環境でした。四年になると、公募展へ出せるので、友達三人でスケッチ旅行をして、日展に応募しましたが自分だけ落ちてしまいました」卒業時には教育実習で行った中学校から声がかかり、そこで非常勤の教員になった。その年に日展初入選。七面鳥を描いた作品であった。

高校、大学では日展に出品されている先生もおられ、日展を目指すのは自然な流れであった。そうした先輩方もいるなかで、指導をいだけ、自分を高める勉強の場として、山口華楊先生の研究団体晨鳥社に入会させていただく。一方、卒業するころには家の仕事も仏画を完成させることができるまでになっていた。末寺には、御影、肖像画を、門徒さんには、仏壇にかける仏画を本願寺に調進し、修復も行う。現在も指名で依頼され描かれることもあるという。

こうして、父の期待もあり、日本画の技術を習得する高校・大学と進み、動物や花が好きだった渡辺さんは花鳥画の先生である山口華楊先生のもとで学ぶことを決めたのだ。







は緑の山が迫って見え、庭にはスズメやメジロのための餌箱が置かれ、次々に小鳥が訪れているのが見える。目の前の山が、秋には紅に染まるという。まさに自然を愛し自然を描く渡辺さんのアトリエである。机の回りにはさまざまな道具が置かれている。その一つ一つを丁寧に説明くださった。どれもこれも思い出と愛着がある品々である。十数回訪れたという中国でみつけたハンドメイドの筆入れやそれぞれの地でみつけた石。それぞれきちんと年月日や出土地が書かれている。

棚に収められたスケッチもそうである。描く対象を前にして、写真は撮らない。すべてスケッチをしておく、記憶のなかにその色も匂いもすべて整理されて入っている棚は、モチーフごとに分かれている。なかでも椿や牡丹など、よく描くテーマごとにひきだしを分けて保管している。近年の作のみで、過去のスケッチはまとめて紙で包んでしまっているという。現場では、その時間や紙の大きさに合わせてスケッチの方法も変わっていく。

桜や牡丹を描くなら、花が咲く前にスケッチしておいて、咲くころ、色を付けるころに、また現地で見て描く。ただ生きている植物は同じ色や形をみせてくれることはないのです、一瞬の出会いが大切である。あたたためておいたテーマの中から、この花を描こうと決めたら、その花が、どこでい



山口華楊先生は、言葉よりも態度で示す先生であった。スケッチを重視し、いつもものを見つめて、夢中でスケッチをされていた。そうした姿を見て大いに影響を受けたという。たとえば、クロヒヨウやキツネを描くときに、粘土でその小さな動物を作り、上から見た構図で描かれることもあった。その小さな粘土を型どりしたレプリカを師の形見としていただいたという愛らしいキツネの置物が応接間に飾られている。また、山口先生愛用の絵皿を一枚いただき、額装してアトリエのいつも目にはいるところにかけている。渡辺さんはひとつひとつのものをととても大切にされているのが



「夏草」2015年 改組新第2回日展 内閣総理大臣賞

師が対象をスケッチする姿に学ぶ

よくわかる。そうした思い出の品に囲まれて、これまでスケッチしてきた野山の美しい花を作品としてまたよみがえらせる。

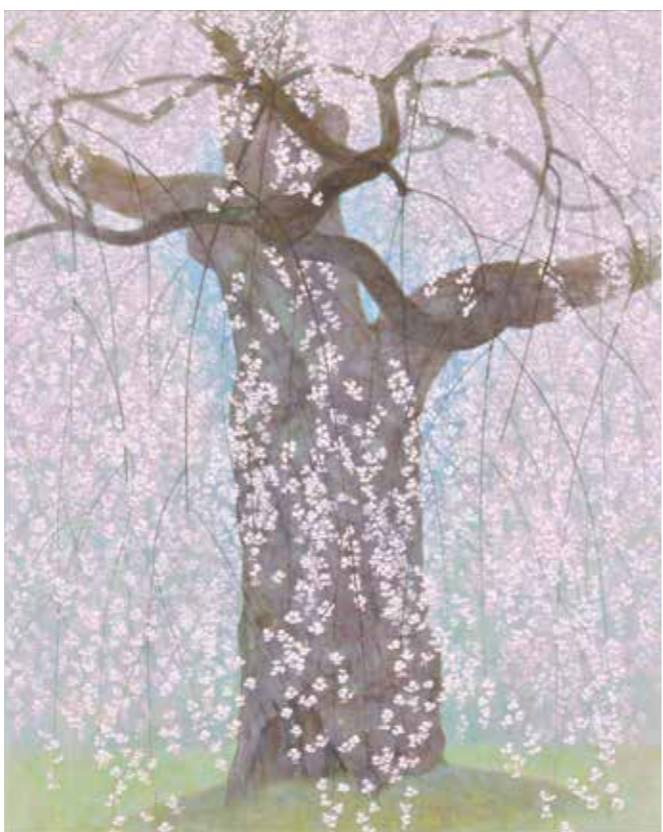
また、若いころから旅が好きで、さまざまな地を巡った。中でも一番多く行ったのは中国である。中国といっても広大な土地その風景のスケッチも多くある。新疆ウイグル自治区の天山山脈付近にある丘陵、火焰山を屏風に仕立てたこともあるという。

今年の花を描く

制作のテーマは花を描くことが中心であるが、いまあたためているテーマに上賀茂神社の御所桜がある。つぼみの時にスケッチをしておいて、制作が進むうちに見事な花を咲かせる。村上市華岳の秋柳図のような柳と大きな桜を組み合わせた柳桜や、また速水御舟の名樹散椿もずっとテーマである。常に自然と向き合って、身近な草花でも小さなスケッチを重ねる、この仕事の仕方は生涯変わらない。最近では、気候変動の影響か、植物が消えていくのを憂いている。花を求めて京の西へ西へと行く。

そしてその花と出会ったときの感動を大切に、スケッチをする中で色も形も記憶に深くとどめていく。小さくメモで日付をいれる。

「イメージがあるとそこにスケッチに通います。だいたい実際目にしたものでないと僕の場合は入れないですね。必ず見たも



「枝垂桜」2012年 第44回日展

ちばん美しく咲いているか、どういう構図にするか、考えを巡らせていく。

アトリエの中には旅の記憶をよみがえらせる品々も多い。二十五歳で台湾に出かけ、国立故宫博物院を見たのを皮切りに、中国には最も多く十回以上出かけた。結婚前には二カ月、日本画家石本正先生主催のツアーで、ヨーロッパを巡ったことがある。バスでの旅だった。中世の教会の壁に描かれたフレスコ画に日本画との共通点を見出し、画集で見た名作を目の前にし、感動した。こうした経験もその後大きく役立った。

若い人へのメッセージをいただいた。「若い人はできるだけ時間があつたら、先人が作られたものを、自分の眼で見ると

の、スケッチで描いたもの。カメラや映像は元々使わないし。昔からの絵描きの勉強方法です。山口先生はそうでしたからね。塾で遠足などに行くと牡丹の写生をして、先生はお昼も忘れられて、まだ描かれているというそういう先生でした。ああだこうだという指導はなかったですけど、実体験で見せる、絵に対する姿勢がすごいなと思いましたね。描くのは今年の花でないダメなんです。描いたもので去年の花を使う場合もあるけれど、今年は花菖蒲を描いてみようと思つて、植物園や平安神宮、梅宮神社の池とかで取材して構成して、やってみたいなと思つています」

さて、三十四歳の時に、京都市立芸術大学で六年ほど非常勤講師を勤め、その後、京都精華大学では非常勤から常勤となり、助教授、教授を務め、六五歳で特任教授、七十二歳まで非常勤で勤めた。農鳥社は、山口先生が亡くなられてしばらくして退会した。絵表所の仕事もその間ずっと、朝は会社に行き、昼は大学で教え、夜は描くという生活であった。いまは、会社もまかせて、絵に専念されている日々である。

取材で集めたさまざまなものに囲まれたアトリエ

アトリエにご案内いただいた。フロアリングで、窓から明るい光が入る大きな部屋である。右手と奥に大きな窓があり、外に

いうことはあつてもいいのかなと思います。頭で知っているという知識だけではなく、本物を見ることは大切ですね。時間を惜しんではいけない。時には旅をして、いつでも動けるようにしておくこと。そして物を見て描くこと、描いた色も感じる。写真は資料であり頼らないことです。目で見て遠近も感じて描くことです。そして、今はマチエールから入る描き方もありますが、日本画の刷毛を使って塗って深みを出していく手仕事の部分も見たいですね」

終始にこやかに、お話しくださった渡辺さん。そして帰り際にはガレージの壁の所に巣を作り、顔を出している燕の雛を見せてくださいました。



## 町田博文



茨城県笠間市までは上野駅から特急で一時間ほど。町中を過ぎて緑の田園を眺めていると、すぐに石岡に着いた。乗り換えて降り立った近代的な駅から歩いてほどなく、ゆったりとした空気の流れる静かな住宅街のなか、庭にきれいな花が咲くご自宅へ。毛並みの美しいよくなれたシェットランド・シープドッグとお出迎えてくださり、明るい陽射しの差し込む、広々としたアトリエで、制作中の大作を前にお話を伺った。

### 中学校で出会った美術教師に憧れる

笠間市に生まれ育ち、地元の茨城大学を卒業。茨城県の高校の美術科教員として勤めながら洋画家として着実に歩んでこられた町田博文さん。

「画家」との初めての出会いは中学時代に遡る。「小学校から中学校へ上がった時に、教科をそれぞれ専門の先生が教えるというのに驚きましたね。算数は数学に、図画工作は美術の授業になって。ベレー帽をかぶった美術の梅里哲夫先生は、創元会に所属する画家で日展にも出品していました。先生との出会いはまさにカルチャーショックだった。元々絵や工作が好きだったこともあり、中学では美術部とバスケットボール部に入った。先生から油絵とともに、ピカソやルノワールなどの画家につい

て学んだことはとても新鮮で、「将来は先生のように、好きなことをして暮らせたらいいな」という気持ちが膨らんで、美術を専門に勉強してみたいと思ったんです」

高校では、先輩方にいろいろな話を聞いて進路について真剣に考えた。「美術大学へ行ってもすぐに画家になれるわけではない。それでは、一生絵を描きながら生きられる道ってどういう道なんだろうか。憧れた先生のように、きちんとした職に就き、収入を得て、生活をしながらならば一生描き続けることができるだろう、ということころまで考えるわけですね。高校一年で、堅実な道を生きたいという決意が固まった。ご両親もこうした考えに反対はされなかった。町田さんには絵を描き続けることが一番重要なこととはっきりわかっていったのだ。



「グラサレマの踊り着」2022年

地元で教員養成系の茨城大学があり、その美術科を受験することに決め、現役で合格。大学時代は、教員になることを目指す学生ばかりのなか、町田さんは画家を目指して、絵の研鑽に励んだ。「幸運なことに、茨城大学には日展作家がいて、指導をしていただきました。光風会の西田亨先生です」。先生から発破をかけられ懸命に学んだ。そうしたなか、光風会の寺島龍一先生の絵に憧れるようになり、真似てデッサンを描いていたところ、それに気付いた西田

### Profile

(まちだ ひろぶみ) 1953年、茨城県生まれ。寺島龍一に師事。1976年、茨城大学卒業。1982年、第14回日展初入選。2000年、第32回日展「雪の朝」により特選受賞。2003年、第35回日展「新雪の麓」により2回目の特選受賞。2018年、改組 新 第5回日展「新雪の河畔」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事。



先生が、寺島先生を紹介してくださることになった。大学三年のとき、西落合にあった寺島先生のアトリエに、自分の絵を担いで持っていったのが最初の先生との出会いである。それからは、年に三回ほど先生のアトリエで学んだ。

四年生になると、教員になるなら高校のほうが絵を描く時間がとれるのではないかという思いで、茨城県の採用試験を受けて合格。最初は特別支援学校へ赴任することになった。そこでは時間を作ることが難しくなったが、学ぶことも多く、使命感もあって六年間働いた。その間も同僚の先生にモデルを頼むなどして絵を続けていた。

「その後転勤で新設高校へ移ったのですが、そこでも面白い体験をしました。硬式野球部の顧問をしたんです。硬式野球の経験はなかったのですが、校長の指示で、美術部と両方受け持ちました。このことが縁で、名前だけが教職を退職するまで硬式野球部の顧問はやりました。もう一歩で甲子園という経験も何度かありました」。夏の甲子園の予選大会で引率の責任者になったり、細々いろいろな仕事があったが、絵を描くことだけは絶対に止めなかった。三十八年間の教員生活では何度か転勤もあった。「忙しかったですね。一方で絵描きの顔があり、一方で教員の顔もあって」。学校ではきっちり教員として過ごし、家では絵を描く、しっかり分けてきた。

最後の学校は、名門の水戸第一高校





「新雪の河畔」2018年 改組新第5回日展 文部科学大臣賞



二〇〇〇年の特選以降、海外の風景を背景に、エキゾチックな衣装を着た女性が佇

### 構想に時間をかける

現在は、後進の指導のために、町田さんがいろいろな所に向いている。  
また、個展の活動もある。三十点を一堂に陳列する日本橋三越での個展も今年五回目を迎え、六月に開催された。  
十年前には教員を定年退職した。硬式野球部の顧問をしたり、学校行事などいろいろなことがあったが、現在も当時の野球部員が個展を見に来てくれたり喜びも多い。  
「幸い最後に勤めていた水戸一高は生徒も優秀だし、同僚も非常に理解ある先生方ばかりだったので、恵まれていましたね」



で、硬式野球部と美術部の顧問をしながら、十八年間勤めた。硬式野球部の教え子で美術方面に進んだ生徒も多くいるという。

### 人物の背景にヨーロッパの風景を描き特選を

作家活動としては、寺島先生のアトリエで指導を受けながら、大学卒業時から光風会に入選。日展には三回ほど落選したこともあるが、入選を続け、茨城県展にも出品してきた。そうして、大きく人生が動いたのは二〇〇〇年、日展の特選を受賞した年であったという。

日展に出し始めた頃は、室内で椅子に座る女性像を主に描いていたのだが、思い切って背景に風景を描くということを試みた。すると、特選だったのだ。描いた背景はパリからシャルトルまでの道すがらの冬景色。ちょうどこの六年前に取材をしていた。「この時が初めての海外旅行で、満四十歳になった年。決して早くはないです。教職で長い休みがとりにくかったり、取材するための方法や手段が判然としなかったこともあり。あることがきつかけで、イタリアとフランスにそれぞれ五日間の取材旅行にでかけることができました。著名な美術館では図版でしか見たことのない絵画や彫刻の名作に感動し、地図だけをたよりに町中を徒歩で巡りながら地元の人々とふれあい、夢中でスケッチするなど、

たいへんな刺激を受けました」。その時の資料がベースになった。

また二〇〇〇年は、ちょうど学校の文化的な行事の責任者になっており、学生参加のオペレッタを作るようになったのだ。音楽が専門のご夫人の協力で「こうもり」というオペレッタを作り、町田さんは学生の指導や経費面を仕切り、かなりの時間を費やした。夏になっても日展の作品はあまり進んでおらず、行事の本番を迎え、その後、ようやく絵を完成させて出品したのである。すると背景に風景を描いた作品は、研究会で「今まで君が描いたことのないような絵だね」と評判にもなり、絶対落選だと思われて出品した作品が特選受賞になった。師の寺島先生がそうした作品を描いていたこともあり、このスタイルで行っていいんだと



「雪の朝」2000年 第32回日展 特選

んでいる作品を描いている。モデルは声楽家としても活躍中のご夫人とのことである。どのように制作されているのかを伺った。まず取材であるが、教員時代は長期の休みの時、夏か冬に、自ら旅の計画を立てて、仲間とでかけるとのこと。現地で撮影した写真や資料、スケッチなどをストックし、次はどのような作品にするか構想を練っていく。こういうシチュエーションにはこういう衣装で描こうと考えていく。アトリエには、現在制作中の作品の衣装がトルソーにかかっている。豪華な刺繍の袖飾り、帽子にも美しい装飾がある。靴も衣装に合わせて何足か置かれていた。衣装についてはご夫人が飾りをつけたり作られることもあるという。意外にも衣装やアクセサリ、家具まで、国内の専門店などで揃えるそうである。衣装が揃うと、デッサンをし、その後、本画のための正確な人物デッサンをする。ここまでできると、背景をどうするか、さまざまな資料をもとに、また考えを巡らせる。現在進行中の作品はコロナ禍直前に取材したザルツブルクである。

「やはり構想に一番時間がかかります。衣装の準備などもあり、段取りが一番大事です」。この準備を慌てずしっかりやることにしているという。そうしてキャンパスを張ったら、あとは丹念に描いていく。段取りや本画のデッサンまでに二、三カ月を費やす。現在大作を年に二枚、そのほかに県展や個展のための準備など、常に頭の中

いう確信ももてた。翌年からは、背景となるヨーロッパ取材が始まることになる。寺島先生には特選をたいへん喜んでいただいたが、翌年、病気で他界され、また転機が訪れた。

### 師からはデッサンの大切さを学ぶ

振り返れば、寺島先生には、大学三年のときから教員時代も、ずっと、光風会や日展の出品前にはキャンバスをくるくる巻いて筒に入れて持って行って指導を受けていた。師からは、常にデッサンの大切さを教わった。「それが制作の原点になっていきます。今でもモデルさんを呼んで、デッサン会を続けているんですよ。もう三十年以上になります」

パステルと木炭で描いたという数々の人物デッサンを見せていただいた。大変な枚数である。「今はパソコンのデータをそのまま拡大して絵にする人も多いですが、モノを見てとらえてそれを形にするということがデッサンの基本的な方法で、先生に教わったものをずっと貫いています」

「振り返れば、人生のなかで何度か人との出会いがあって導いていただくことができたというのがすごく大きいですね。地元茨城県の先生方や仲間たち。また、寺島先生亡きあと、故・清原啓一先生や現在日展顧問の寺坂公雄先生、藤森兼明先生には多大な薫陶をいただけてきました」

にはいろいろな構想があつて、計画に沿って描いていく。その生活をずっと続けているのだ。

今後も、これまでの流れで目の前の仕事を淡々と進めていこうと考えている。茨城県の組織である「茨城県美術展覧会」では副会長を務めており、その中で後進育成にも努めておられる。

若い人たちに向けては、「絵の根幹はデッサンだということを強く言いたいです。それはある程度修練しなければ身に付かないと思うんです。芸術文化というのは大事な世界だから気持ちがある人にはぜひとも志してほしい。ただ生活することと創作活動をするをしたたかに考えないと、両方ともダメになることがある。今はそういう時代だと思うので、慌てないでしっかり考えて生きてほしいと思いますね」

これまでは本当に忙しい毎日を送ってきた。「確実に一歩一歩歩いてきたということはあるでしょうね。夢中でやってきたという感じはありません。でもそうやって先生方や先輩や仲間が助けられて、日展の道を歩いていくことができました。自分がしっかりとやっていけば、若い人たちもきっと同じように輪をつないでくれると思うんです」。制作中の大作を前に、語ってくださったその言葉は、たいへんな重みをもって響いてきた。



## 池川直

彫刻家 — 日展監事



鹿児島大学のキャンパス内の緑の芝生のなかに、池川直さん制作の、実業家・鹿児島大学名誉博士の故稲盛和夫氏の彫像がある。桜島の火山灰が堆積してできた石の台座の上に立ち、学生たちをあたたかなまなざしで見ている。稲盛氏は鹿児島大学工学部出身で、地元を愛し、大学に多大な寄付をされたという。

瀬戸内海の  
穏やかな気候の中で育つ

池川さんは、海と山に囲まれ自然豊かな香川県に生まれ、瀬戸内海の穏やかな気候のなかで育った。父池川敏幸さんは、愛媛県出身の彫刻家であり香川大学の教授であった。毎朝起きると、父親は机に向かいあたくも設計図のようなデッサンを描いていたという。子供心に興味をもって、学校の帰りに大学に遊びに行ったりしていた。幼児の造形教育にも携わっていた父は、いろいろな素材と教材を子供たちのために用意していた。「幼少の頃からのこうした体験から今のように素材に興味をもったのか

なと思います。家の中に彫刻はほとんどなかったけれど、デッサンを描いたものが壁に貼ってありました。頭に浮かぶ形を描いていたのでしょね。それは僕もそうで、頭の中に浮かんできたものをデッサンしています」

そもそも彫刻を始めたのは高校時代。教師から習い、父から教わることはなかったという。当初は油絵を描いていたのだが、その先生から「彫刻をやったほうがいいよ」と言われ手ほどきを受け、兄をモデルにして等身大の塑像を作ったのが最初だった。恩師は仏像が好きで一緒に奈良に行くことも多かった。そうした体験が今、仏像的な

ものや乾漆像を作ることに繋がっている。高校を卒業すると、筑波大学へ進学。大学では塑像を中心に木彫も石彫も作った。大学院の修了研究では乾漆をテーマに、素材と表現の関係を研究してきた。それぞれの表現の違いをみながら、その時のテーマによって技法を変えている。

大学院修了時には大学に残るよう勧められたが、やり残していることや抽象作品を作っている父の造形が気になって、故郷へ戻り、香川県立高松工芸高校の教員になった。そこで木彫を教えるよう言われた。大学でも学んではいたが、「ちよようにど実習助手の先生がひとりついてくれて、手板の教



「伝説の島」2004年 第36回 日展 石



## Profile

(いけがわ すなお)1958年、香川県生まれ。1983年、筑波大学大学院芸術研究科修了。同年、第15回日展初入選。1994年、第26回日展「道」により特選受賞。1996年、第28回日展「もう一人の私」により特選受賞。2017年、改組新 第4回日展「エトルスク 古代の記憶」により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組新 第5回日展出品作「時の旅人」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事、鹿児島大学教育学部教授。

え方や手ほどきを見て、独学で木彫を勉強しました。あの時代がなければ、これまで木彫でこんなに作品を作ってこなかったと思います」。こうして三十二歳まで、レリーフなどの木彫を教えていた。

日展に初出品したのも、地元に戻った二十五歳のときだ。戻らなかつたら、日展に出していなかったのではないかと考える。というのも、大学時代は佐藤忠良先生、舟越保武先生、一色邦彦先生等がいらした新制作に出していたのだ。日展は、香川県展の審査員をされた大学の恩師晝間弘先生の薦めで出品した。高松は工芸が盛んで、漆をはじめ、日展作家が多く活躍していた。三回、四回目は乾漆で出した作品が連続で落ちてしまったこともあった。忙しい高校では、なかなか制作の時間がとれず苦労したが、途中で定時制に移ることができた。

父親を介して  
中村晋也先生と出会う

こうして七年、美術教育と彫刻の研究を続けていたおり、母校の教授から、茗荷谷にある大学の附属小学校に来てほしいと声がかかり、戻ることになった。平成二年のことだ。そこで、「父と東京教育大学の先輩後輩であった中村晋也先生に出会うわけです。それで、中村先生が鹿児島大学を退官されるときに誰が鹿児島大学に行くのかと思っていたら、そういうことになったわ







「エトロス古 古代の記憶」2017年  
改組 新第4回 日展 ブロンズ



とらえないで心の赴くまま感じて欲しいですね」  
フランスでは、十一世紀の教会建築に付随するロマネスク彫刻を研究していた。そうしたなかスペインで偶然ザビエル城に遭遇し、その三年後には、奇遇にも鹿児島でザビエル像を作ることになった。「やはり現地の空気を感じていると作るものが変わってきますね」。ザビエルが青年時代に勉強した部屋や彼の通ったパリ・ソルボンヌ大学を思い浮かべた。「その場で作るのが一番ですが、そういう意味で野外での制作体験が好きなので呼ばれたら必ず行くようにしています」  
ルーミアアで四年に一度ブランクーシを唄んでの石彫シンポジウムがあり、池川さんはその日本代表として参加した。彫刻家六人が、三週間にわたり灼熱の夏にそれぞれ野外制作を行うのだ。みごとに一番に評価された。池川さんは香川出身、同じ香川



けです。中村先生のご指導をいただいで、以後三十年ほど鹿児島にいます。父がいなかったら中村先生とはたぶんお会いできていませんでした。尊敬のできる素晴らしい先生と巡り合ったと僕は思います」  
「中村先生からうかがう、フランスの話から憧れ、いつかは現地に住み勉強してみたいと思いました」  
鹿児島大学に赴任してからは忙しい毎日であったが、さらに海外で学びたいという思いが膨らんでいた。何度か文化庁の在外研修員に応募したが、フランス・イタリアは競争率が高く、日本芸術交流財団と、文部省の短期在外派遣という形でフランスに留学することになった。四十二歳の時だ。

一年間デザインの国立美術学校へ通うが、制作は概念による造形思考が主だった。そこで、日本人交流会の方たちがイタリア人の彫刻家でイタリア国立カッターラ・アカデミア教授のフランク・フランキを紹介してくださり、フランス中央部デザインからイタリア・リボルノまでの約四〇〇キロの道のり、車を運転して会いに行くことになった。

### イタリア人彫刻家 フランキとの出会い

フランキさんとは初対面から意気投合し、以後、教え子が現地に留学するなど、長い交流となる。「やはり、実際に動いて、直

接会いに行かないとだめですね。常に積極的に行動していかねば得ることのできない貴重な体験である。池川さんは常に自ら実行してきた。あるとき、フランキさんからボルテラという町に行くよう勧められた。古代ギリシャ期のエトルリア人の町で、細長い人物の彫像が多く残っている。それにヒントを得て、「ボルテラの詩人」を制作した。タキシード姿に麦わら帽子を背負った体格のよい男の姿。足は細い。デフォルメのきいたこの作品の評価が気になったという。

フランキさんはリボルノの港に浮かぶ一隻の、一見すると塊のような鉄の廃船を見て、どう思うかと問う。また、古代の町であそこを見てくれと。それは自分たちの民族の原点みたいなものを見てくれというのと同じだと感じた。自分のアイデンティ



「ボルテラの詩人」2010年 第42回 日展 FRP

を最後の制作の場にしたイサム・ノグチはブランクーシの弟子だったという切り口で地元新聞に大きく取り上げられたという。さまざまなお話を伺うなか、彫刻作品を見るポイントを教えてください。「裏が見える彫刻というのはやっぱりいい彫刻なんです。側面から見ても後ろから見ても立体だという作品。一つの方向から見えるだけの形が問題ではないのです」

池川さんが黄金比でデザインしたアトリエは全方向から光が入る全光型で、時間とともに光が変わるので、作品を屋外に展示しても堪えられるという。  
窓側や壁側に小さなエスキスが並ぶ中、父親の作品もところどころに並んでいた。池川さんは、鉄を溶断した跡を生かすという特徴的な表現を借りることもある一方、父も影響を受けてか若い頃にはない人体表現を八十歳になって作り始めたという。池川さん親子は香川県の文化功労者となっている。

現在は、香川県三木町にある昨春秋に他界した父親の美術館のアトリエで制作することも多く、東京の茗荷谷の拠点と鹿児島ではアトリエと大学の研究室での制作となっている。  
近年は、ミューズのシリーズに取り組んでいる。「全部で九体のうち、いま六作目にとりかかっています。既に完成している二体の女神と併せて十一体すべてができた。展覧会をしたいと思っています」。フランスから帰国後には、二、三年に一度銀

ティを大事にしないといけないのではないかと、それを教わった。自分のものを出していくときには、その生まれ育った最初の記憶などを生かしていくのがよいのではないかという思いに至ったという。

現地で彼は、デッサンを油彩で描いていた。また若い頃からコンセプト重視で、自分が彫刻で何を表現したいのかが大切だと説く。人体を通して何を作りたいのかが明確でなければ絵にも描けない。だからまず絵から入るか、言葉から入ることになる。それをフランス・イタリアで学んだという。人体の骨格や肉付けをデフォルメさせ、表現したいものはつきりしていれば作品としてはよい。芸術は自己表現で、技術は後からついてくる。「作家の感動に対して共感を覚え、この作品いいなという人が少しでも多くなればいいですね。彫刻を難しく

座で新作での個展を開催すると決めて、それを実行している。

またアトリエの奥には仏像彫刻が見える。大山祇神社総門の隨身像塑造原型である。今年八月からの松山のミウラト・三浦美術館での展覧会に出品予定だ。亡き父池川敏幸さんが監修し、二年半という長い年月をかけて神社境内の倒壊した樟材をつかった寄木造りで作られたという。

アトリエの外は、海と山を望む芝生の庭である。この地に移る前から庭にはまず二体の関連する彫刻を置くことを決めていたという。リボルノのフランキさんのものに行く途中、ニースに泊まり、地中海に陽が昇り沈む、日がな一日海のきらめきを眺めて過ごしたことがある。そこで、海（ラ・メール）、女性の形で海と光と太陽を表現しようとする想を得た作品。その左側には、光の方向性を示す作品を設置したので。

撮影していると、大きな蝶が飛びかっている。燕が飛んでいたりミツバチが来たり桜島の降灰も少なく自然豊かなこの地を池川さんはとても気に入っている。初めて知人の紹介でこの地を訪ねたとき、この海が故郷の瀬戸内海に見えたという。

アトリエ内や庭先、鹿児島大学の中など、池川さんの作り上げてきた作品の数々をエピソードとともに伺っていくと、一つひとつの作品が、池川さんがこれまで切り拓いてきたまっすぐな道であり、池川さんの分身のように思えた。



# 春山文典

金属造形作家 一 日展理事



とある六月の午後、小布施駅のホームに乗客の一群が降りると、「栗の匂いがする」と言う声が聞こえてきた。何のことかわからないまま町をタクシーで走ると、あちこちで低く枝を広げている栗の木に白い花がたくさん咲いていた。運転手さんがこの花の匂いだと教えてくれた。

おぶせミュージアムでは、金属造形作家である春山文典さんの三十年を振り返る展覧会が開かれていた。春山さんは母方の実家である小布施で生まれ、学校に入るころには東京へ戻ったが、小布施とは縁が深い。小布施は北齋が晩年、一八四二年から四度訪れた町として有名である。中心地には、栗の老舗の和菓子店や、情緒ある街並みが残っている。

春山さんの作品タイトルは宙、風、樹など、夢やロマンを思わせるが、作品は白銀色のアルミニウムの抽象作品。三十年の集大成の作品群を前に、これまでの軌跡を伺った。

## 北齋の町、小布施に生まれて

春山さんは四人兄弟の末子として終戦の年に生まれた。小・中学校の頃は図画工作がとても好きで、特に絵が得意だったという。「その頃は、戦車とかではなくて、湖があつて木立があつて月があつて、不思議な蝶がいて、という神秘的な絵を描いていた思い出があります」

兄弟にも美術系の人はいない。ただ、先祖を遡ると、江戸時代の儒学者で浮世絵師

の高井鴻山は北齋に師事し、栗菓子で有名な小布施堂の先祖と言われているが、春山さんの家はその遠戚にあたる。「だから美術に対しては割と抵抗感なく、周りもまあいいじゃないって感じてした」

小布施堂の店内に置かれた春山さんの黒のアルマイトを使用したモダンな金工作品は、店で鈍い光を放っていた。また、小布施駅前や市の総合公園にも大きな作品が設置されている。

高校は都立工芸高校でインテリアデザインのコースを選んだ。「空間造形というか、舞台美術もやりたかったんですね」。卒業時、周りの人たちがそのまま就職するなか、もう少し学びたいと東京藝術大学の工芸科へ進む。しかし、そこは希望どおりの学科ではなかった。



## Profile

(はるやま ふみのり)1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学(現・横浜美術大学)学長。2016年、改組 新 第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。横浜美術大学名誉教授。



セットを作ったこともある。しかしそれは結局ハリボテの世界で、幻滅してしまっただけという。そこで大学三年時には、実際に何か面白い素材を勉強したいと考えた。一学年六十人のうち、半分は商業デザインや工業デザインへ、金工は彫金、鍍金、鍛金の三つ、陶芸と漆、染色などに分かれた。最初に実習で選んだのは彫金と陶芸であった。しかし、鍍金を選んだ学生の話や、溶かして流し込む鍍金のほうが面白そうだなと思ひ、鍍金のクラスに飛び込んだ。教室には伝統工芸系の先生と日展系の先生がいたが、考え方や教育が全く違っていった。新しいものを取り入れたい春山さんが電動サンダーを使用していると、伝統系の先生からは「お前、手でやってみろ。無精だ」と言われたという。それでも春山さんは新たな方法で進んでいった。

## 東京藝大で 蓮田修吾郎先生との出会い

そうしたなか蓮田修吾郎先生との出会いが大きなターニングポイントとなった。先生は折に触れ、合理的な考え方や自分の夢を語り、これからの金工についても説いた。春山さんは「自分が望んでいたのはこれだ」と思った。「非常にフレキシブルな考え方で伝統や古いものにこだわらない蓮田先生の作品にも惹かれました。例えば、立方体を作るときに、普通は直線で水平面に

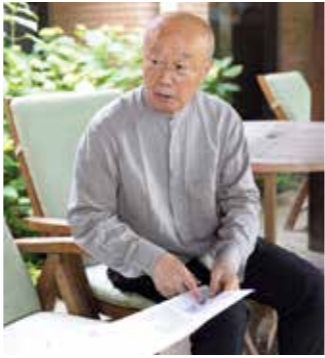


「風の門」2000年 第32回 日展

びしっと作りますね。先生の作品では一平面でなく、日本古来のそり、それからむくりという膨らみを使っています。スカイツリーで澄川喜一先生が使った日本の伝統のそりとむくり、まさにそれなんです。蓮田先生の師が高村豊周という回転体の大家です。だから先生は立方体にこだわって師のマネをしなかつたんです。春山さんは蓮田先生の指導を受け、比較的自由に制作することができた。

卒業する頃には日展や現代工芸展への誘いがあつた。「ただ、当時は美大生特有の公募展嫌いというか、出さないのがかっこいいというのがあつて。何か自分でやるんじやないか、空間造形的なものを独立してやろうかなというので、就職もせず公募展にも出さずデザイン事務所を作ると蓮田先生にお話ししました。すると、玩具





原型のあまりうまくいかない所を直したり加えたり削ったり、ある意味では最初と違うものになる。僕のやっていることは、再現ではないんです」

構想の段階は、アイデアスケッチや設計図を起こして、発泡スチロールや段ボール等で模型を作る。できた模型を上から眺めたり逆さに見たり、ここが面白いなというのを楽しむ。木で原型を作り、鑄造工程では工場で溶解炉の職人さんにゆだねることになる。その後で上がったものを見て造形的にいけない部分を切ったり接合したり仕上げにはいっていく。こうしてさまざまな工程があるため、計画性が必要である。若い時に携わったデザインの仕事の工程管理がそこに生かされているという。

「僕の作品は、テーマは風や宙や樹など、具体的なものですが、思いは徹底的に抽象的なイメージです。技術的な面では、やはり見たことのない空間性を重視しています。自分でもこれは前やったなっていうのは絶対作らないですね。前回と違う空間を作っています。日展では高さ八十センチの中で、どう空気感を作っていくかです」

近年の金工作品は彫金、鍍金、鍛金が隣同士組みあう傾向にある。「ジャンルの統合というのはいくつかも出てくるんではないでしょうか。僕の場合は明快に技術の伝承ではなく、新しいものを作り、新しい考えを皆さんに共感していただくということです」。

メーカーのデザイナーの仕事やニチベイブランドという会社を紹介してください。まだ大学院の学生の時で、紹介いただいた会社に行くのと、工場長や重役が出てきて「明日から顧問にしてあげる」と言われ、東京駅の自動券売機の壁などの開発が採用された。新たな世界で懸命に取り組んだが、それはインダストリアルデザインの方向だった。仕事があつて嬉しい反面、自分の夢からは離れて行き、忸怩たる思いであった。

「蓮田先生には何かと気にかけていただいている、蓮田先生を中心に日展の鍍金の先生方が銀座でグループ展をやるから『お前出せ』って言われたんですね。そこで小さな作品を作ったところ、『売れたぞ』って最終日に言われて。努力して売っていたのだと思うんですけど、その打ち上げの日に、先生方と銀座で飲んで夜の十二時頃になったんですね。『今からみんなお前の所へ行くよ』って。当時飲んだことがないような洋酒を三本買っていただいて、三、四人の先生方が来られて、そこで説得されてしまったんですね。『まあ飲め』と言われるころから、『あの作品いいから日展に出せ』『はい』ってつい言ってしまうって、その次の年から出しました」。

一九七六年、第一五回現代工芸展、翌年の第九回日展である。日展には初出品初入選、以降一度も休むことなく作品を出し続けている。プラインドの仕事からは離れたが、



「水のステージ」1993年 第25回 日展



「山車」2022年 第9回 日展



「宙の響」2017年 改組新 第4回 日展



常に新たな空間を作り出すことを信条としている。会場に並べられた数々の斬新な作品群はそれを物語っていた。

**アルミニウムの無機質にこだわる「魔法」**

作品には色をつけない。それは色によって情感が出てしまい、形の本質が違ってくるとはならないか。そこで当初から一番無機質なアルミの色にこだわった。同じ白銀色でもステンレスの磨いた色とも違う。金工作品を作りだして二、三作目からずっとアルミを使っている。

「アルミって本当に形がよく見えるんです。形というのは実体ですが、ほどよい陰影が出てきます。昔はもっと神経質で、ざらざらの肌を磨いて一方のヘアラインにもこだわりました。ただ、それは本質と違うと考え、今は、もっとマットな感じに仕上げているんです。大切なのはどう空気を感じるかということになります」

今年も最近の流れの中で新しい空気感を作っている。長い工程を経て完成したときは喜びもひとしお。

「作品ができたときは、まさに魔法ですよ」

その銀白色の輝き、複雑な陰影を作り出す作品群は、あたかも魔法によって世に現れたかのようなだった。

当時の経験が作品づくりのヒントになった。細かいところから積み上げていく仕事の本質を掴むことができたのだ。

もう一つの大きなきっかけは、翌七八年蓮田先生がドイツの作家と交流したいということ。日展の金属造形作家展を手伝ったことから、毎年作品を発表する機会と交流ができた。当時金属造形作家展と合わせて、年に三回三作というペースで制作することになったのだ。

**小さい所を積み上げて常に新たな造形を**

その制作工程はどのようなものか伺った。「日本の鑄造の原点は基本的には鑄型を二つに割ってそこに金属を流し込むということ。動物の形などは二つに割れないですね。そこで割れる所を一つずつ部分的に型を作って組み合わせていく、小さい所を積み上げて大きく作っていくというモノづくりになります。また一方ではデッサンのように、大きな形で掴んでからディテールを攻めていくというのがあります。僕の場合はやはり、小さなものを積み上げてでないと大きくなってこないですね。鑄造というのは、ものを再現するのが原点なんです。粘土で作ったものを石膏に置き換え、石膏像をもとに鑄造という技法で金属に置き換えていきます。ですから三度同じことを繰り返しているわけなんです。しかし



# 真神魏堂

書家 — 日展理事



京都・東山で、鎌倉時代の建仁二年（一二〇二）に開創した、京都最古の禅寺、建仁寺。その広大な境内の北側に位置する塔頭のひとつ、正伝永源院の元住職で書家の真神魏堂さん。春と秋のみ一般公開をされている由緒あるお寺で、現在も、多才な活躍で奔走されている。朝のお寺でお話を伺った。

## 僧侶としての宿命に生きて、書と出会う

昭和十八年、東山のお寺の二男として生を受けた真神さん。寺は、明治初期の廃仏毀釈を経て、祖父の代に、建仁寺の塔頭のひとつ正伝永源院の僧侶として引き継がれたという。

「私は今年ちょうど八十なんですけどね。作家という意識はいまもないです。お寺に生まれていますからね。住職がどうしても主になっていきます。幼いころに兄と弟を亡くし、二男の私が寺を継ぐことは、宿命でした。お寺の子ですから書道を知っておくのはよいと父も思ったのでしょう」。真神さんは、小さいころから、白い紙をみつければ、絵ではなく文字を書いている子供であったという。それは祖父もそうだったと聞いた。

小学校一年の時に、学校で習字の選手となったのをきっかけに、近所で習うようになった。生涯の師となるのは村上三島先生であるが、その門下の僧侶で書家の上松義山先生が、真神さんが通う小学校の前の禅居庵で、書道の研究会を行っていた。小学生から大人まで五、六十人はいたという。学校が終わると、そちらに駆けこんで練習する日々であった。「他の稽古もしませんしね。その頃そろばんが流行り出して小学校五年から二年だけ習いましたけど、それ以外は時代が違いますしね」

その後は、京都学芸大学（現・京都教育大学）の書道科に進学。同級生は六人という少数精鋭の中で、「古典を勉強せよ」という指導のもと、学んだ。大学の書道科の教授はアンチ日展という立場の教育方針で、学生で公募展に出すことは奨励されなかつ



「轆轤」2016年 改組新第3回日展 東京都知事賞



## Profile

(まがみ ぎどう)1943年、京都府生まれ。村上三島<sup>さんとう</sup>に師事。1967年、京都教育大学美術科書道卒業。1968年、第11回日展初入選。1992年、第24回日展「五嶺」により特選受賞。1996年、第28回日展「舒位詩」により特選受賞。2009年、第41回日展「于謙詩」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展「轆轤」により東京都知事賞受賞。2017年、改組新第4回日展「碧澗」により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組新第4回日展出品作「碧澗」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。

た。村上先生からは大学では大学の教えに従っていくよう指導を受け、研鑽を積んだ。また大学二年から三年に上がるときには、建仁寺の本山に僧侶として一年間の修行に出た。

「私は大学時代からお手本をもらったことはほとんどなく、古典を見てそれを書いて添削していただくということでした」

大学四年のときには、村上三島先生門下の長興会のなかでも京都版の現創会に入り活動を続ける。「そこは日展の系統ですから、自然と日展中心に作品をつくることになります」

「日展の一回目は落選でした。二回目は通していただいて、それからあとはわりと順調に通って九回目か十回目で一回落ちましたね。それでもそんなに厳しいところで学生の初出品から今までで三回くらいの落選で済んでいるのはやっぱり幸運だと思います。私はこういう所に生まれているという良さだけでなく、私の八十年の人生は運だけで来ていて、本当です」

上松義山先生は、お坊さんでしたが、当時特選を一生懸命狙っておられました。最終的に隸書で特選をとられました。父親と年齢も変わらず仲が良かったことから、自分も特選をとって親父を喜ばせたいというのが根底にありましたね」

こうして書道に打ち込みながら、大学は教員養成校であったので、卒業後は小学校の教員になる人も多かったが、真神さんは私学の







「寒潮」2020年  
改組新第7回  
日展

高校の教員となり、十五年ほど勤めた。

**漢詩を借りて、表現する**

作品について語っていただいた。

「展覧会に出すと、見に来る人は何という字ですかとか意味を聞かれます。それが一番辛いところで、書家は漢詩の意味を表現したいわけではないんです。極端に言えば、無なら無という字を表現したいから書くわけではなくて無という文字の骨格といますか、縦とか横の線の組み合わせの姿の面白さとかね。墨と筆を使って画仙紙に線を引くということでも線の面白さ、深さ、強さと言いますか、線そのものの意味もありますね。だから、そういう紙にどういう筆を使ってどれだけのスピードでどれだけの圧力をかけて書いたらどうい線が出るか。滲んだりもしますし、かすれもしますし、滲みは滲みの美しさ、かすれればかすれの美しさがあります。だから、そういうものを総合的に漢詩を借りて表現する。意味は一切とは言いませんけども別に表現したいわけではないんです。書家と同じ立場で見てもええたらもつと面白い世界ができるかなと思うんです」

「書体は大体中国の古典を臨書という方法で勉強します。それを使って表現するわけですから書体は自ずから臨書したものと同じような書体になります。私の場合は、

「お寺しながら学校行きながら、ながら族もいいところであれやこれやしてきました」  
方丈のなかに案内いただくと、そこには元総理、東京の永青文庫の元理事長である細川護熙氏が描いた襖絵が広がっており圧巻である。正伝永源院の歴史が感じられる貴重な仏像も安置されている。今後文化財の展覧会なども東京で予定されているが、寺が一般公開されるのは、春と秋の特別拝観の時のみだそうである。

寺の門をくぐり、正面の部屋が真神さんの書の部屋である。ここで稽古もされるという。障子越しに日の光のうつすらと入るなかで、漢詩をお書きくださった。力強い筆の運びに息をのむ。大きな白い紙に、フランスよく文字が書かれていく。時が止まったようだった。

部屋のふすまの取っ手を見ると、美しい絵が描かれた陶板でできている。これは、小学校から同級生で親友である永楽善五郎（現在「而全」さん）の作で、特別に作っていただいたものだという。昨年、百貨店で書と陶磁器の二人展も開催している。

**師の言葉**

「作家ではなく職人になれ」

村上先生からいただいた言葉のなかで、最も心に残っているのは「作家ではなく職人になれ」という言葉だった。書の世界は、同じことを何度も繰り返し、鍛錬していく。



「碧海」2017年 改組新第4回 日展 文部科学大臣賞 日本芸術院賞

行書か草書ですね。それが体の中に入っておって漢詩を選んだら、たとえば春という文字を古典で学び、春というものが自分の体の中に入っているのを自然な姿の中で出していく。次に花という字を書く。春と花が文字として絡み合うかとかね。一つで終わる場合と、二つの場合だと二つになったからの世界もありますよね。そういうことがどんどん増えていくわけで形も変わることでよって随分複雑な算数ができるわけですね。だからそれを経験値でやっていきます。だから草稿というのを作りますけども漢詩を選ぶときには経験で大体この詩はこういう格好になるな、というのが想像できるんですよ。詩をうまく選ぶと、良い作品に仕上がることが多いです。だから漢詩を選ぶのも力の一つですね」

師からもお手本はいただかなかつたが、真神さんもお手本は書かない方針という。「それぞれの個性が出てくるから面白いのです」

寺の仕事については、二〇二二年一二月一五日に住職をご子息に譲った。住職として三十五年、さまざまなことに関わった。なかでも織田信長の弟で茶人の武将、織田有楽斎の国宝の茶室である如庵の復元移築、明治初期の廃仏毀釈で失った室町・戦国時代の茶人で、千利休の師としても知られる武野紹鷗の供養塔も有楽斎の四百年遠慮にあたる二〇二一年に大阪の藤田家から返還された。また寺に併設していた保育園が大

「職人というのは、同じことを何度も何度も繰り返してやるということ、例えば筆を扱う技術とかそういうものはそれも自由自在に筆が使えるようにする。昔はそれを普通の筆記用具として使ってたわけですから昔の人は書の世界で言う職人とかかわりませんね。作家ではなくて職人かわからない。何百枚も同じものを書いて手紙を出すわけじゃなくてみんな一枚書いて出してる

きくなり、別の地に移転させたことなど大きな事業を成し遂げた。

方丈の濡れ縁から美しい日本庭園を眺めながら真神さんは語る。寺に生まれ、その道は、仏門の厳しい修行のちに老師を指す方向とそうでない道があるという。真神さんは、寺と書道、教育者と多方面に活躍されてきた。保育園では園長も務めた。



わけでしょ。それを古典として大事にするわけですけど。だから村上先生の持論は、作家は職人の行き先であるわけです。まず、職人ほどのテクニクと言いますが、そういうものを教書いて覚えなさいといけない。頭で書いては分からないということ、関西の書壇は、どちらかというところという鍛錬主義ですね」

作家という意識はないという冒頭の言葉は、こうした考えからもきているのだと感じた。

精神統一して白い紙に向かう。幼いころに白い紙を文字で埋めてばかりいた少年「宿命」のままに、迷うことなく書の道に進み、漢詩にひかれ、漢詩を書く。すべては長きにわたる鍛錬を経て、自分の体の中から出てくるもので書く。

「たくさん書いても一枚目がいいんです。それは、無心であるから。いらんことを考えない。もう一枚もう一枚となおして傷をとっていくと、新鮮さが消えていきます。無心で書けたら最高です」

僧侶として、書家として長い時間を重ねてきて、いま無心で書を書く。

今年、京都文化博物館で寺宝展「四百年遠忌記念特別展 大名茶人 織田有楽斎」とともに、真神さんの書の展覧会を行った。「次の個展はいつできるかわかりませんが、もう一度寺の中で色々集めてできればと思っています」



## 古澤洋子

日本画家 — 日展会員



金沢市街の高台にあるアトリエ。部屋の奥にある窓の向こうに夕日が沈み、晴れた日は遠く日本海のきらめきが見える。高い建物はなく一本の坂道が続いていく。一日のうちの長い時間を過ごす理想のアトリエ作りは、条件にあった場所を探るところから始まったという。こちらで制作をして九年。金沢駅から三十分ほどの閑静な住宅地である。

制作をしながらクラシックや友人のピアノ演奏を聴くことも多いという。広いフロアリングの明るい空間でゆったりとした時間が流れる。ちょうど、北アルプスを描いた数々のスケッチが床に広げられていた。

日本画家、古澤洋子さんが絵を描くようになったきっかけから伺った。

### 多感な時期に身に降りかかった 試練を乗り越えて

金沢市内で、公務員の両親のもとに生まれた古澤さんは、物心ついた頃から、絵を描くことが何より楽しみな少女であった。新聞の折り込み広告の裏に、空想の絵を描き続けた。足りなくなると壁にも描いては消した。そして「画家になる」と周りの大人に公言していたという。

学校での美術の成績は常に良かった。しかし、多感な中学生の時期に、厳しい体罰教師と出会ってしまい、心身ともに傷つき誰にも助けてもらうことのできない苦しみの日々を送ることになる。高校に進学した

が、中学時代のトラウマから心は荒んでしまい、不登校にまで陥った。抜けだせないなか、毎日熱心に電話をかけた様子を見に来てくださったのが高校二年の担任教師だった。決して見捨てず勇気づけてくださった教師の想いに、古澤さんの心は動いていった。先生は、生徒の見本になるべく常に目標を設定して有言実行する人であった。そうした背中を見て、古澤さんは、もつとちゃんとした人間にならなくてはいけないと強く思ったという。ここから快進撃が始まる。

将来を考えると、諦めていた「画家」の姿が浮かんできた。自分にはこれしかない。



「刻の堆積」2003年 第35回日展 特選

一念発起して金沢美大受験に焦点を当て猛勉強を始める。周りの人が驚くような毎日を送った。友人とのつきあいも絶って、ひたすら勉強する。夜中から朝までは受験のためのデッサンや着彩の勉強、睡眠時間を二、三時間にまで削った。十キロ痩せて、学校で、受験に必要な教科のときは寝てしまうことも大目に見てもらえるほど、周りも協力的だったという。人生でこれほど本気で真剣に勉強した時期はないとまでいえる。辛かったが目標に向かった一年。古澤さんはみごと合格となる。

この一年は、古澤さんの人生を大きく変えた。「すごく人間的にも成長できました。

あの一年があったおかげで今があるのだ、と思える実のある一年でした」。自らが決め実行し、つかみとった。多感な時期を乗り越えて、古澤さんは日本画の道に進んでいく。日本画を選んだのは、日本人として日本の絵画を学びたい、知りたいという思いで自然なことだったという。

### 大学時代から日展へ。 日展で育ったと実感

金沢美大の先生方はみな日展に出品していたため、三、四年になると、教授の指導のもとに自然と日展に出品する流れになっていた。東京や京都からも客員教授として日展の先生方が指導にいられた。伝統工芸がさかんな「工芸王国」の石川県という土地がら、日展作家も多く、日展は常に注目されていた。「当時日本画は、美大の教授など地元作家にまだ会員はいなかったほど、入選入賞は難しかったように思います」。だが、迷うことなく、日展入選を目指して年に一度の大作を描いた。入選したい一心であったが、四回続けて落ちてしまった。周りの人たちが入選していくのにと悲観的な思いにとりつかれたこともある。大学院を卒業し、いよいよ一人になったとき、初入選。大きな不安がある中取材をして図を作り、小下図を何枚も描いて制作して出品したのだ。入選作は石川県白山市の手取川が大海へ向かって流れていく風景を



## Profile

(ふるさわ ようこ)1968年、石川県金沢市生まれ。1993年、金沢美術工芸大学日本画専攻大学院修了。2003年、第35回日展「刻の堆積」により特選受賞。2004年、文化庁第38回現代美術選抜展出品。2007年、第42回日春展 日春賞・外務大臣賞受賞。2008年、第40回日展「未来の化石」により特選受賞。2011年、明日への視座三人展(石川県立美術館)。2013年、第45回日展新審査員 就任。2014年、公募団体ベストセレクション美術2014 出品(東京都美術館)。2017年、石川県文化奨励賞 受賞。改組 新 第4回日展審査員 就任。北國文化賞 受賞。2022年、第9回日展審査員、現在日展会員。日春会会員。財団法人石川県美術文化協会理事。





性が広がっていくのだ。

**山の風景から  
時の堆積や地層、宇宙へ**

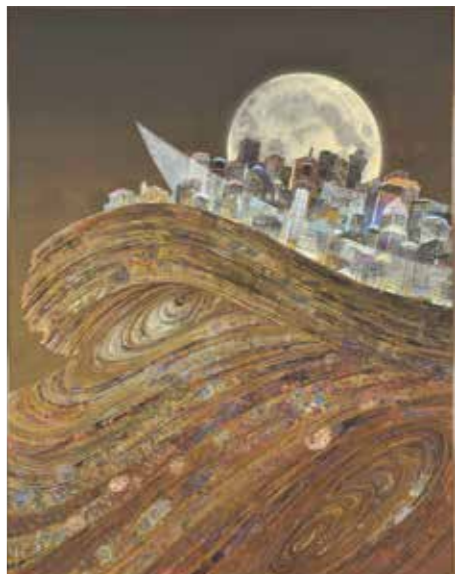
これまで描いてこられた作品について伺うと、自然の風景、中でも山が好きで描いてきた。最初は視覚的な山の形などにばかりこだわりの、自然の本質がつかめなかったという。そこで、実際に山に登って大地のエネルギーを感じたいと思った。「実際に登り始めると、見ていただけの美しい山と違い、厳しい世界、荒々しさを見せつけられ、人間というのは、自然にあらがうことはできず、地球に生かされているちっぽけな存在なんだということもわかりました」。地元の標高二七〇〇メートルの白山に登ったのが最初で、雨と霧のなか五時間かけて登り切ったら晴れて目の前に山脈が広がり、無我夢中でスケッチブックを出して描いた。「こんな素晴らしい世界があったんだ」と感激したという。「きつと達成感も加わったからで、達成感とはやはり挑むから得る感覚で何にも代えがたいものです」と。特に槍ヶ岳や穂高が好きで、北アルプスに多く登って描いている。二十七歳で本格的に山に登った頃から、古澤さんの視点は変わっていった。「山に行くたびに、地球の作り上げた造形物に感動するんです。そして山や、空から見れば人間はもう見えなくなる。蟻も人間もみな一緒で唯一無二の尊



描いた。

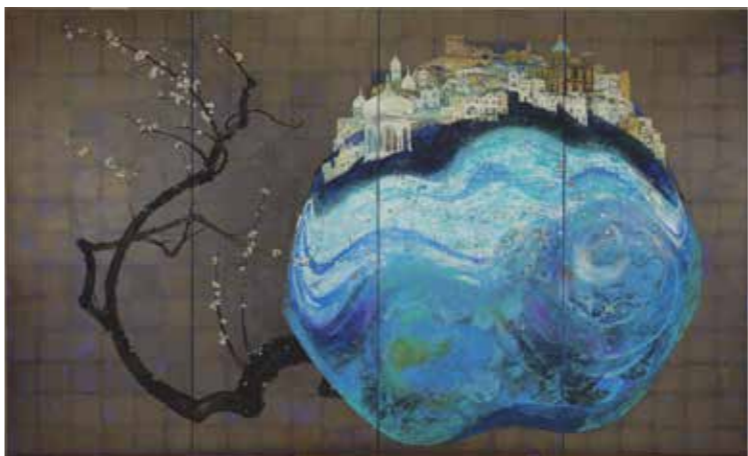
受験の時に発揮した根性で、これからも一人でやっつけていこうと決めた。その後何度か落選し、ショックを受けるが、戻ってきた絵を冷静に見ていると、落選した理由に納得ができて、力不足を反省して次に繋げればいいと前向きに思ったという。土屋禮一先生からは「入選することよりも、良い絵を描くことを目指しなさい。それだけを考えていればその後評価がついてくる」と、何度かお話しいただいた。その言葉に支えられた。良い絵を描く一心でひたむきに精一杯描くことに集中したのだ。

「振り返れば初入選から三十年。私は日展を中心に今まで来ましたし、そこで成長させてもらったということをつくづく思います。そして、会員というのは作品が鑑査されないで、たとえば気を抜いたような作品を描いたとしても必ず展示されてしまう、それが怖いと思います。毎回、こ



「歴史の難波船」2013年 第45回 日展

れ以上ないという気持ちで描かないと恥ずかしい思いをします」。常に自分を駆り立てて高みに挑戦していく姿がそこにはある。また一人で誰の目にも触れることもなく下絵本画と描いて出すことを三十年繰り返している。そこで常に大切にしているのは、自ら客観的に見ることであり、そのためには絵の世界から離れた方々との交流も大切にしている。人を通して紹介いただくなかでも会社経営者や事業主の人が多く、自ら立ち上げて何かする人と、一人で絵を描く作家とは共通することも多いと感じる。そうした交流が刺激になり、支えられてき



「青い星に棲む—神秘—」2023年

たと思うことが多い。

古澤さんは、高校の芸術コースの非常勤講師としても日本画を教えている。大学を出るときに採用されて、今に至るまで続けている。挫折を知らないで大切に育てられている現代の若い人達の危うさ、自らが通ってきた過程との違いに戸惑いを感じながら、教師としても奮闘している。

作家活動としては、秋の日展と春の新日春展、石川県の現代美術展の三つに欠かさず出品する。三十代の頃までは、全国の絵画コンクールを調べては、会派の違う先生の評価を求めて出品してきた。また自分を追い込むように、個展も積極的に開いてきた。

こうして、公募展を軸に活動してきた古澤さん。若い作家の公募展離れについて「若い方たちには、『挑む』ということを大切にしてもらいたいと思っています。これは何に対しても言えるでしょうが、苦労を避けて楽なことばかり選んでもいても人生豊かにならないのではないかなと思います。公の美術館に展示されて多くの人の評価を得るなかで成長していく楽しさを味わってもらいたい」と切に願う。

公募展では、ベテランも若手も一緒に展示される中で客観的に自作を見ることが、自分で気づくことが大いにある。しかも、作品が巡回すると、より多くの人に観てもらえる。古澤さんいろいろな地方の知らない方から「日展でいつも見えています」と言われ感激した経験がある。さまざまな可能



「青い星に棲む—成長—」

道を見ては、ますます考えてしまう。人間とは何だろうか。そうした「想い」が古澤さんのなかで避けては通れず、それを絵にしたいと考える。「想い」をどのように表現するか。宇宙の中の地球というマクロと、生活というミクロの視点を同時に意識した図で「想い」の表現を試みる。そこで、空想画やファンタジーにならないように、説得力が大切だと考え、常に取材を重ね、体感実感して描くことを基本にしている。

アトリエを出ると、吹き抜けのエントランスホールには、古澤さんの好きな版画家松浦敏夫の小品が二点かけられている。ヨーロッパの古い街並みを描いた、どこか幻想的な作品。この銅版画との出会いでも大きなインスピレーションを得たという。

玄関の右手の小部屋は、古澤さんの作品を静かに鑑賞できるギャラリーになっている。六、七点の作品が展示されていた。地層を描いた作品や、日本画ならではの顔料のきらめきが美しい近作。一枚一枚の絵の額装にもこだわっている。寸法や布の色などすべて細かい指示をされるという。

い命なんだと」。

その後、ヨーロッパのスケッチ旅行に誘われ、歴史の染み込んだ町を描くうちに、目に見えない「時」を強く感じ、同時に生命の歴史や地球上の生命を描きたいという山で実感している考えに繋がっていった。そうして時の堆積によって風化したものの、民家の屋根瓦を描いたり、さらに時の流れを深く感じさせる地層に惹かれ、意識して観察するようになった。地層には過去の命が積み重ねられている。地球は、生命が生きる星。青く輝く地球上の生命がなぜ、殺し合うのか、現実のテレビニュースの報



# 錦織重治

洋画家 一日展会員

洋画家の錦織重治さんは、神奈川県綾瀬市にある、市民のための油絵教室で教えている。ただ、その教室を始めるときに、普通の絵画教室ではつまらないので違いを出したいと思い、「習作のまま終わらせることなく一枚の作品として仕上げることを目標に、描いた絵を持ち寄って、ひとりずつ個別指導をすることにした。この講座は好評で、もう二十年も続いているという。錦織さんのお話を伺っていると、すべて、自分ならではのオリジナリティを大切にされているのが感じられる。それは錦織さんの生き方そのものなのだろう。訪ねた綾瀬市のアトリエは、木のぬくもりの感じられる家具やイーゼル、山小屋風のランプや古い時計などが美しく並ぶ落ち着いた空間で、部屋の奥にはロフトもある、まさに山岳画家の部屋である。このアトリエから四十年間、数々の作品が生まれてきた。



## 父の運営する児童養護施設で見た水彩画家の技術

島根県出雲市に生まれ、幼いころに母親を亡くされた錦織さんは、父の運営する寺院であり児童養護施設で、五十人（延べ二〇六人）ほどの児童とともに育った。絵との最初の出会いはその施設の中だった。慰問に訪れた水彩画家が子供たちの見ている前で、空想の絵を描いてみせた。ヨーロッパの教会や海の絵など、色がついてどんどん描きあがるさまをみて、「絵というのはすごいな」と、子供心に思った。衝撃的なきごとだった。小学校一年生頃

の記憶である。その後、学校では、図工の時間になると夢中になって絵を描いていた。六年生るときに写生大会の学校代表に選ばれることになる。皆が授業中に、選ばれた三人の生徒は誇らしい気持ちで画板を持って、写生大会に出かけて行くのだ。そこで描いたのは、池があって、そこに木が映っている風景画だった。みごと賞をとることができた。それは大きな成功体験として心に刻まれた。振り返ると小学校の時の先生が、日展に入選されて、校長をはじめ学校中が大騒ぎになったことがあった。そのとき、日展と

いうことばを覚えたのである。中学では水彩画を学んだが、その後高校では美術部はなく授業もたいへんで、絵からは遠ざかってしまった。卒業後は、迷わず東京へ出た。友人を頼って何も決めずに東京に出ると仕事を探した。東京は魅力にあふれ、苦勞を感じたことはなくワクワク感でいっぱいだったと振り返る。いろいろな職場を転々とした。しかも、昼と夜別々の会社に勤めた。それは何よりも好奇心旺盛でいろいろ経験してみたかったからだ。そうして、インテリアデザインの会社に行



## Profile

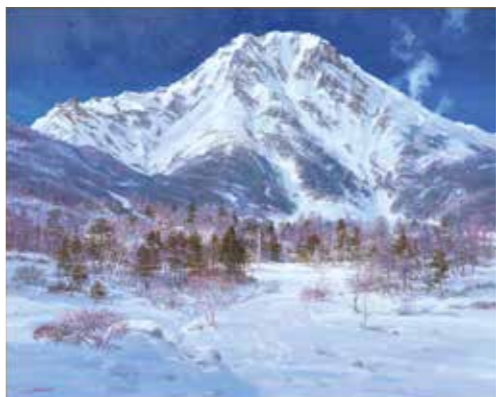
(にしこおり しげはる)1947年、島根県出雲市(旧平田市)生まれ。橋原健三・樋口洋に師事。1973年、示現会洋画研究所に学ぶ。1986年、示現会展 安田火災美術財団奨励賞。1987年、安田火災美術財団奨励賞受賞者展 優秀賞。2011年、第43回日展「白き朝」により特選受賞。2012年、示現会展「光彩(夢科山)」により文部科学大臣賞。1983～2013年、松屋銀座デパートにて初個展以来隔年連続開催。2014年、改組 新 第1回日展「白き朝・赤岳」により特選受賞。1996～2023年(公財)聴覚障害者教育福祉協会事業、全国絵画展審査員。2020-2022年、日展審査員。現在、日展会員、示現会常務理事。

きついたのは八社目だったという。興味があれば指導してもらえるとということに意気込んでいたが、残念ながら倒産してしまう。やがて神保町の書店に勤めることになる。その職場で出会ったのは、昼間や夜の大学で学びながら働く若い人たちだった。刺激を受けた錦織さんは、それまで貯めたお金で夜学に行くことに決めた。そこでも懸命に学び、三年間で全単位を取得。あと一年間、空いた夜の時間に何をしようかとはたと思った。

「そうだ、絵を描こう」  
その前に師となる画家との運命的な出会いがあった。目黒区の電子部品の製造会社に入社したばかりのとき、樋口洋先生がご自身の印鑑の仕事で会社に来られ、昼休みに、錦織さんが目の前にある黒電話をスケッチしているところをカウンター越しに見て「絵がお好きですか?」と声をかけてくださったのだ。「好きです」と答えたら「一緒に勉強しませんか」。

後で会社の人に尋ねると、「一枚の絵」で有名な画家だと知った。こうした出会いから、樋口先生の自宅の二階で木炭デッサンを教わる日々が始まった。その後、油絵をやりたいと話したところ、先生が油絵道具一式を買ってきてくださったのだ。二十三、四歳くらいのときだった。

「樋口先生は売れっ子作家でありながら、『グループ展を銀座でやろうよ』と誘ってくださったのです。しかも大通りに面した



「白き朝・赤岳」2014年 改組新第1回日展 特選





の具を選ぶというように、徹底して自らの道を目指した。

直近では涸沢に出かけた。上高地の大正池の向こう側である。あるとき冬の山に出かけると、農家の人が雪の上をすたすた歩いてのを見て、かんじきという履物の存在を知った。夏場は木道の上しか歩けないが、これがあれば、雪の上をどこにでも行ける。誰も見たことのない景色を探して雪の上を歩いた。錦織さんは常にオリジナリティを求めている。

日展出品の経緯は、個展会場でお客様から「日展に出さないのですか。それってお客様からすれば残念ではないですか」と言われたことによる。榎原先生からも促され、出したところ、初出品で初入選。しかし、その後、立て続けに落選してしまっただ。そこで、落選したときは、悔しさのなか日展会場に行つて、鑑賞者の目の動きを追った。どの絵が注目されているのか細かく観察したのである。三十代のときから個展を開き忙しい日々を送っていた錦織さんは、「売絵作家」と揶揄されたこともあるという。しかし、逆にそれがばねになって「売れる絵」「日展に入選する絵」を目指して奮闘したので。

現在は、聴覚障がい者の全国絵画コンクールも審査員も務めている。

小学校の時に学校代表で写生した水のように木の映った風景。これは原点であり、今も錦織さんの作品にはよく水面が出てく



ところであろうと。七洋会と名付け七人の作家が出品することになった。

「夢みたいじゃないですか」。銀座で展覧会に出品できる。就職した電子部品の製造会社は、月に三回土曜も休みで条件が良かった。そこで、生涯の師となる樋口先生と出会ったのだ。

当時は川崎から目黒の職場まで通っていたが、樋口先生と勉強することになり、そばの目黒に引っ越した。錦織さんの人生は開けていった。

「私は人に恵まれていてね、運が良くて今日があるんです」。示現会理事長の成田禎介先生ともその頃からの付き合いあいで、ご指導いただき、島根出身の小川伝四郎先生を紹介いただいた。錦織さんは先輩方の背中を見ながら、ますます絵の世界を深めた。

三十代で銀座で個展を

樋口先生の師である榎原健三先生は、銀座の松屋で定期的に個展をされていたが、なぜか間に合わずにできない年があった。そこで、七洋会として展示をしないかという話が出て七洋会で出品をしたところ、錦織さんの絵に目を留めた松屋から個展をやらなにかというお声がけをいただいた。最初の個展を開いたのが一九八三年のこと。それは、絵画ブームが下火になってきた頃だという。それまでは、多くの絵が世に出



「白き朝」2011年 第43回日展 特選

中、錦織さんは、習作的な絵は世に出さないと決めていた。松屋の初回の個展ではほとんどの作品が売れた。その後、松屋のギャラリーがなくなる二〇一三年まで、二年に一度、大作三点と小品を四〇余点ほど描いた。たいへんなことであった。風景画が中心であり、取材も必要である。

夜に描くことが多かった。アトリエは二十五年ほど前に増築し天井を高く、採光にこだわって天窗もつけた。照明器具も松屋の画廊と同じものを用意し、見え方まで意識して描いた。常に細かいところまで気を配る。作品はいつも搬入の一週間前に仕上げる決めていた。その後の一週間は、細かく部分を点検していくのだ。

山に登って、誰も知らない山の風景を描きたい

錦織さんの制作の特徴は、その山に実際に登ってはじめて描くということ。山岳登山家なのである。その絵からは山の雄大さと清々しい空気が伝わってくる。榎原先生がよくおっしゃったように、その山を越えた向こう側を感じて描くことを心がけるという。「山に登って見れば、山の向こう側がわかるじゃないですか」。しかし、山に登るのはそう簡単ではないだろう。何度も挑戦し、天候などの条件から引き返した経験もある。山にはスケッチブックと水彩絵の具をもって登る。山の装備と併せたいへんな重さである。

最初の本格的な登山は、二十代から長く勤めることになった電子部品の会社の山岳部で登った白馬だった。当時天候が悪くあきらめようというリーダーの方針に、若きゆえ一人反対し登ったところ、雨が吹き上げてきてびしょ濡れになり体力を奪われ、山小屋で寝込むことになった。しかし、翌朝には回復し、生まれて初めて山小屋の外雲海を見たのだ。登頂してからは縦走途中には美しい花畑もある。そこからはもう山の魅力にとりつかれた。

また、山を描くのは、師である樋口先生が描く対象を避けたいという気持ちからだという。樋口先生から絵の具についても細かく教わったが、ある時から師とは違う絵が続いていく。

戦し続けながら、山岳画家として単なる描写だけでなく自分の想いを描写していきたい」と語る。錦織さんの挑戦は果てしなく続いている。



「北穂高南峰」2020年 改組新 第7回日展



## 丸田多賀美

鹿児島空港から車で三十分ほど、温泉地としても有名な霧島市。第一幼児教育短期大学で保育者を目指す学生を教える、彫刻家で美術教員の丸田多賀美さんを訪ねた。大学の周りにはいくつもの校舎が立ち並び、幼稚園から大学まで揃う私立の教育機関となっている。案内された校舎の中に入ると、丸田さんの日展出品の彫刻作品「あら、おはよう」が迎えてくれる。振り向いて、後ろの猫に声をかける母親をモデルにした作品だ。淡い色あいの着色がなされ、丸田さんの作品には犬や猫がいたり子供がいたり、ほのぼのとした温かみのある独特の世界がある。

仙台に生まれ  
中学校から鹿児島へ

丸田さんは東北出身の母と鹿児島出身の父のもとに仙台で生まれ、その後、父親の転勤により小学校は東京や横浜で過ごした。子供のころから図画工作が好きだった。中学生になると、父親の故郷の鹿児島へ戻ることになり、家族は横浜から鹿児島へ飛ぶ。そこで、まさにカルチャーショックを受けた。祖母の方言での会話は異国の言葉のようで、聞き取れないくらいであったという。ひとり、家で絵を描いているのが好きな中学生だった。高校受験では、美術科が新設される高校のことを知り、そこで学びたいと考えた。入学後、丸田さんには運命

的な出会いが待っていた。

日展作家の上床利秋先生である。

松陽高校の美術科教諭で、しかも担任であった。先生は、個性豊かな学生一人ひとりの良さを伸ばしてくれた。高校では一週間十一コマの美術の授業があり、絵や彫刻などいろいろな体験ができたが、中でも彫刻にひかれ、先生からは「向いている」と勧めてもらえた。器用になんでもこなすことができないうタイプの丸田さんは、あるとき自分の作品制作で壁を感じるころがあった。そんなとき先生は「不器用な人のほうがいいんだよ。器用な人はなんでもこなせてしまうけれど、壁にぶつかると簡単にあきらめてしまう。そうでない



「あら、おはよう」2015年 改組新第2回 日展

人は踏ん張りがきいて、その分正直に向き合えるから、良いものが生まれるんだよ」と。この言葉に励まされ、続けることができた。恩師はことあるごとに、心の中にストンと落ちる言葉で励ましてくれた。衝撃的だったのは、高校二年の美術科の修学旅行でパリ・ローマに行ったことである。これも、上床先生が若いうちに本物に触れることが大切であるという考えと情熱で教育委員会を説得し実行したのである。若いころ本物に接する体験がその後どんなに影響を与えるか想像に難くない。その



## Profile

(まるた たかみ) 1979年、宮城県生まれ。鹿児島県立松陽高等学校美術科第一期生として入学、上床利秋氏に師事。2002年、鹿児島大学教育学部卒業。2004年、第36回日展初入選。2017年、改組新第4回日展「家族から」により特選受賞。2021年、第8回日展「畑仕事を終えて」により特選受賞。現在、第一幼児教育短期大学常勤講師。

学生たちは二十歳になったときにフィレンツェで同窓会をすると決めて、実行したというのだから、結束は固かった。しかし、上床先生は、丸田さんが高校二年の終わりに、私立第一幼児教育短期大学の教員として転職し、より彫刻家としての道を究めたいと公立教員を辞めることになった。だが先生とのご縁はずっと続くことになる。高校時代から、恩師のアトリエで、彫刻制作を体験した丸田さんは、迷うことなく恩師と同じ鹿児島大学教育学部へと進んだ。そこで出会ったのがやはり日展作家の池川直先生である。大学四年間では池川先生や先輩方から展覧会に真剣に向き合う姿勢を学び、自分らしい表現に気づくまでには試行錯誤の日々を送った。

## 日展作家の薫陶を受けて

大学卒業の直前で母親が病気で入院し、進路や制作で迷うこともあったが、その時相談に乗ってくださったのも高校時代の恩師、上床先生だったという。

また、鹿児島大学の彫塑室出身者の中には、女性だけで結成された、サンジャック女流彫塑会という組織が伝統的に続いていた。そこでも多くの日展作家が活躍している。楠元香代子先生をはじめ、多くの出会いがあった。卒業後は、中村晋也美術館の学芸員で、日展作家の野間口泉先生のお声かけから、中村先生の美術館で受付などの







「バスまあだ?」2014年 改組新第1回 日展



げ、現在は年に三、四作品を発表している。さて、勤務先の大学を後にして、丸田さんが連れて行ってくださったのは、恩師、上床先生のアトリエである。アトリエでは制作の場としても、恩師の挑戦やその活動に関わる様々な才能たちに触れる場としても勉強になるといふ。大学からは車で十五分ほど。山の上の山にあり、五百坪もの山林の土地を整えるところから始まり、二〇〇五年頃に建てられたという。

品等は丸田さんの作品だそう。栗林の向こうには大きく口を開いたカバの親子の頭も見える。豚と牛が相撲を取っている像もある。ユニークな作品があちこちに配置されている。作品によっては草に半分隠れてしまったり藁がからまったり。木立のなかに三、四十点の作品がそのまま展示してあるのだ。恩師とその教え子たちの作品群。しっかりとこの場所に馴染んでいる。

割って、燃料として備えたり、さまざまな道具が揃っている。建物の基礎は職人さんが作ったが、かなりの部分を手作り建てたというアトリエである。上床先生は鹿兒島市内にもアトリエをお持ちだが、音や粉じんなど、近隣に気づかれない必要のため、山の中にも作ることにしたという。野生の動物も生息しており、鹿や猪が現れることもあるそうだ。丸田さんは大学講師として勤める中、時間が空くと、このアトリエに通って学んでいる。雨の日も雪の日も。「雪が降ると、また面白いですよ」と笑う丸田さん。小鳥の声が聞こえる緑の森のなか、丸田さんはアトリエの環境を整えたり、作品制作を進めたり、まさに充実した日々を送っている。



業務に携わることになり、また中学校・高校の美術科講師、保育園の造形教室などもしながら、作品作りに励んだ。こうして、高校、大学と日展作家の先生方の真摯に制作する姿を目の当たりにし、学ぶなか、二十五歳のときに初めて日展に出品し、入選した。男性像であった。しかし、「身近な人物をモデルにしてみても？」という恩師の言葉をヒントに、母をモデルに日常のヒトコマを描いてみたいと思うようになった。そうして始まったのが一連のシリーズだ。恩師は常に、やるならば、思い切ってやってみよう励ましてくださった。作品はFRP（ガラス繊維などの繊維を入れて強度を向上させた強化プラスチック）で制作し、複数の色をつけたのが特徴的である。丸田さんは色彩を施すことにより、より気持ちを表すことができると考えた。さりげない日常の一コマを、その人物の内面の深いところまで見事に表現。また時にはコミカルに表現した。作品は多くの人の心をつかんだ。

二〇一七年、二〇二二年と特選を受賞し

### 山のアトリエでの制作活動

てから、丸田さんの人生はまた少し動きを見せる。非常勤講師や美術館の受付などしながら、日展に絞って制作活動をしてきたが、恩師が定年を前に短大の教授を退官し、彫刻家に専念することに。その恩師の推薦もあり、丸田さんが後任として正規採用されることになったのだ。高校時代から自分の道を後押ししてくださった恩師が勤めていた大学の教員に、約二十年后に自分がつくことになろうとは、想像もしていなかったことである。丸田さんは、幼児教育を学ぶ学生たちに美術教育の大切さを伝えていきたいと考えている。学生は構内に置かれた彫刻作品とふれあい、さまざまな思いで会話をしている。着任後、丸田さんは秋の日展のほかに、作品を発表する場を広



「煙仕事を終えて」2021年 第8回 日展 特選



# 井隼慶人

染色家 — 日展理事

比叡山の中腹部、南側斜面の一角に広がる大津市比叡平。京都、大津からも近く、滋賀側には琵琶湖がある。豊かな自然環境で、アーティストも多い土地柄という。京都市生まれの染色家、井隼慶人さんがこの土地を気に入り、移り住んで五十年。モダンなデザインのご自宅は大阪芸大の建築家の設計によるもので、風と光がよく通る、どこから見ても美しい空間である。窓の外には緑がきらめいている。井隼さんの作品は吹き抜けの空間に三点と、ギャラリのような回廊に飾られている。応接間には、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）の師である三浦景生先生の陶板作品もある。モダンな空間で、静かにお話を伺った。

## 高度成長期に学んだ型染め

井隼さんは開戦の年に京都市に生まれた。父親は作家を目指し日本画を描いていたが、やがて生活のためにテキスタイルに方向を変えて図案家になったという。井隼さんの子ども時代は、周辺には自然が多くあり、時間を忘れて遊びに夢中で、中学・高校と、勉強よりも外の自然に目が向いていた。「ただ、戦後の経済復興期でしたので、まずは大学に行かねばということでした。高校では美術部に属していましたし、また、父親の職業関連もあり、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）を目指し、なんとか工芸染織に入ることができました」井隼さんの作品は蠟染めであるが、美大

での最初の授業が型染めであり、その制作過程から得られる表現の面白さに嵌まり、在学の六年間は型染制作にのめりこんだ。大学の教育方針はそれまでの美術界の流れと共に、新しいものの見方や表現の多様性も併せ持っていたが、工芸として制作にあたるには、素材や技法の制約を受けることもあり、指導は基本的にアカデミックな思考をベースにしていた。一方、時代は高度成長期、何をしてもよく、勢いのあった時代。世間では型にはまらない、新たな素材を使ったり、アブストラクトといった風潮の真つただ中であつた。そのはざま、井隼さんは次第に作る作品に思い悩み、大学後半はスランプに陥ってしまったという。

当時は染織を学ぶと、卒業後、社会で活躍できる場は多くあつた。そこで卒業後は、作品づくりから離れ、呉服のデザイナーの道へ進むことにした。約十五年間、商業の世界に身を置いていたが、また創作をしたいという気持ちがあつた。何度か、「展覧会に間に合わない」



「雨乞池」1999年 第9回 染・清流展

「制作を失敗した」等のうろたえる夢を見た。そのくらい創作に戻りたいと思っていたのだ。そうした矢先、「一緒に制作をやる」と言ってくれる友人が現れた。大学の同級生で、やはり卒業後制作を離れ、商

社に勤めていたのだ。この誘いを機に井隼さんは、染織の「仕事」を再開した。四十歳のときだった。これが最も大きな転機となつた。「それからは、人より二十年近く遅れて

しまったということ、追いつきたい思いで懸命にやってきました。自分の仕事は、大学時代の教育内容に沿った仕事となっております」



## Profile

(いはや けいじん) 1941年京都市生まれ。小合友之助、佐野猛夫、三浦景生に師事。1967年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科染織専攻科修了。1979年、第11回日展初入選。1987年、第19回日展「山気」により特選受賞。1993年、第25回日展「静韻」により特選受賞。2016年、改組 新 第3回日展「春のゆく」により日展会員賞受賞。2019年、改組 新 第6回日展「積日惜夏」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事、京都市立芸術大学名誉教授。







描いてほしいと語りかけてくる植物

井俣さんの制作の根底に流れるのは常に子どもの頃から親しんだ「自然への思い」である。

「自然の中に身を置くと、モチーフが描いてほしいと声をかけてくるんです」と、笑顔で語る。井俣さんの手で描かれた植物、生物は、みな生き生きと生命感がみなぎり、生の讃歌を歌い上げているように見える。対象が描いてほしいと言っている。ただそれをそのまま描くのではない。時間をかけてよく観ると同時に最初に受けた一瞬の感動を大切に、井俣さんの目を通して再構築される。また時間をかけて写しているとモチーフを通していろいろな物語を連想し



「雨日好日」2013年 第45回 日展

たりするという。そして作品には常にあたたかなまなざしが注がれているのがわかる。描かれた花も木も、植物もみな幸せそうなのである。

「人智の及ばない自然の不思議さとか、緻密さ、面白さとか、美しさがね。自然に委ねて生きる、その生物としての在り方みたいなこと、僕はそれを表現し作品化したいなと思っはいるんです」

対象に出会ったとき、写真は記録用には取るが、常にスケッチをしていくという。一瞬の出会いが大切で、次にはもう変わってしまったっている。その時でないと得られないものがある。作品にするのに「受けた印象を強調するために誇張したり変形したり等の嘘を描くわけなんです。うまく嘘をつけばより本当らしく見えるだろうということですのでそれは写真ではできないことだと思います」。

四十歳で制作を再開。日展へ

大学時代の恩師、小合友之助、佐野猛夫、三浦景生、来野月乙、西嶋武司、各先生は、みな日展作家であった。井俣さんが再出発した頃も、時代は抽象や個展の時代だったが、自己に正直に自分が求める表現と違わぬ発表の場として日展に出品した。恩師から薦められるということではなかった。そして、井俣さんが縁あって母校の大学で教えているときも、学生に出品を薦めたことは

ないという。「自らが出したいと思ったら出したらよい」、そうした恩師からの教えを受け継いでいる。

一度目は落選だった。落選してからは、研究会に参加し、以後も大学時代の恩師との交流は続く。制作は着物関係の仕事をしてきた時の蠟纈染の技法を生かし出品している。

こうして四十歳から染色家としての仕事を再開し、また京都市立芸術大学の教員の仕事を始めようとしたとき、思いがけずスキーで転倒し、頭に怪我をして入院が続いた時期があった。そのときに名前を「慶人」と改めた。以後、作品にはKEIJI INというサインがなされている。一九八四年、父親を亡くしたときに「生きる」という作品を作り、京都市長賞を受賞した。名前を改めた後のことである。黒い大きな影で父を表現した作品である。これが再出発の後押しとなる。

「父は仕事を再開したことをとても喜んでくれました。自らが遂げられなかった夢を遂げてほしいという思いがあったのでしようね」

また「日展という公募展に出品することで生涯制作の場に居られるのは大変幸せなことと思っはいる」と語る。

「今は、自分に残された時間を考えますね。自分のこととして、身に染みて考えるようになりました。そこで自分が感じていることをどういう形で表現していくかがこ

れから先の仕事の内容ではないかなと思っはいるんです。それは結局、命のつながりなことだと思っはいます。今改めて自分の表現テーマを見つめ直し、今までとは異なる表現ができればと思っはいます。これを言葉で言うのは簡単ですが、色と形と構図を通してものを言うというのは難しいですね。ただ、このことは昔から多くの表現者がそれぞれで行ってきたと思っはいますので、自分の想いを何らかの形で見る人に伝えることができればと思っはいます。

染色による表現は薄い布に色量のない染料と制限された技法を通して多次元の世界で感ずることを平面化する究極の平面表現と言えます。それだけにこの上ない難しさを感じますが、表現にあたっては模倣化や異なる時限を同一画面の中に滑り込ませる等の密かな遊びを行っています」

染色ならではの美しい色の構成について伺うと、「描いている時はもう色のことより対象物が語る伝言を写すのですが、制作する時になると勝手に色が出てくるんです。なぜか分かりませんがそれはモチーフの持っている色もありますし季節の色という、自分なりに解釈している色というのがあって、それがベースになって、そこに時間とともに変わっていく色のイメージというのが自分なりにあるんです。染料が持つ特有の透明感や鮮やかさを意識し、その色を生かすためにその持っている色をどれだけの量で増やしたり、大きくしたり少なくした



「オータム コア」2016年 第38回 日本新工芸展

「創作したい」その思いがふくらんで四十歳前後で「仕事を再開」し、なかば強迫観念のようなものもあり、遅れを取り戻したい一心で、まっすぐに進んできた四十年。美術界も時代が大きく揺れてきた若き頃の葛藤を経て、制作から十五年間離れ、また再開を果たした。それは、夢にまで現れたきたるべき転換点であった。やがてまた、幼い頃から自然に触れて育った「自然への思い」を、表現していく。常に対象に呼ばれて描いている。必然としてできあがっていく作品。美しい色の並びも構図も、井俣さんのフィルターを通して生み出されていく。

若い人へは「好きな道を進んでほしい。自らの生きた証を残してほしい」と語る。それは、自らの制作への想いとも重なる。



# 深瀬裕之

加古川市は、兵庫県南部の播磨灘に面し、播磨平野を貫流する加古川河口に広がる豊かな自然に囲まれた地域。兵庫県で活動を続ける書家の深瀬裕之さんは、かつて両親が住んでおられた場所をアトリエとして、たくさんある蔵書も自宅から運び、書の世界を整えたいという。静かに書に集中できるアトリエで、これまでの軌跡を伺った。

## 高校一年で 小山素洞先生と出会う

昭和二十七年、神戸に生まれた深瀬さんは、小学校三年から中学までは習字を習っていた。当時、そろばんと習字はセットで習うのが決まりのようになっていて自然なことであったという。高校に入り、選択科目で書道を選んだところ、最初の授業の時に、書道部の顧問である一楽書芸院の小山素洞先生から書道部に誘われた。一楽書芸院では、当時、高校生を書道へ導くことにとても熱心であったという。高校一年での小山先生との出会い、ここからずっと書道へと導かれていくことになる。

書道部に入ってみると四、五十人の部員のなかで男子は多い時で三人だった。書道部では、先生から手本をいただき、部室で書いて、それを先生の所に持っていき指導

を受けていた。三年になると小山先生からは、書道の教員免許のとれる花園大学への進学を勧められ、花園大学の国文科へ進む。「書道科はなかったので、国文科の中で書道の単位をとりました。花園大学では、どちらかというと漢字の人が多かったですね。当時は学生運動がまだあって、全般的に授業に出るといふ雰囲気は薄れていて、私はそれほど書道を熱心に行っていたわけでもなく大学に通っていました」

大学でも書道部に入るが、「部員の中には、同じ年齢でも先生のように見える人もいました。私がいかに技術的に未熟だったかというのは今思い返せばよくわかります。花園大学で書道を学ぶ人は入学するときに既に師匠についているので、その師匠と同じ道というのでやっていましたね。そうでない人は本当に限られた数人でした。村

ところへ気まずい感じで持って行った。すると、たまたま一楽書芸院の作品指導の会だった。深瀬さんの作品について、他の先生から「君は西行の小色紙をやっているのか」と、聞かれたという。

「全然そんな気もなく勝手に書いて持って行った作品がそう見えたようです。出来が悪いけれども何かほめなければいけないときにそういう言い方をされたんですね。すぐに書道用品店でお手本を買いました。小色紙というのは特異な感じの古筆でした」

## 歌の中身から考察する

それからしばらくは西行の歌に興味をもった。現在は万葉集から題材をとることが多いという。「万葉集自体が歴史書の面も持っていますから、歴史的事実が根底にある歌は好きです。日本史に名前が出てくる人が詠んだ歌で、たとえば中大兄皇子と大海人皇子、額田王が皆同じ時代で、三角関係を想定させるような歌が万葉の歌に残っているとか、権力闘争の末にいろんな悲劇が起こった情景を詠んだ歌とか、それを見ていくと、歴史は後からいくらでも改ざんできますが、その時に詠まれた歌には何か真実が入っているのではないかなと。また私は草仮名を多く使っていますので、平安の歌は草仮名で書くよりも女手の文字を使って書いた方がしっくりくるような気



上三島先生の長興会の人たちは早くから日展に出されていましたが、私の場合は大学を卒業して数年間は、日展はまだ早いと言われていました。日展は大変な難関で、出すこと自体がステータスのようなところがあったんです」

大学時代、小山先生のところにお稽古に行くことはほとんどなくなっていた。卒業が近くなり、将来を考えだした。卒業後は教員になりながら書道を専門としていく人が多かった。作品を書きあげ、小山先生のがするので、私はさらに古い時代の歌を書いています」

深瀬さんは、歌の中身から入っていく。「文字の形はその時々でデフォルメされ変わるその場所にいちばん合う格好で書いたらいいです。左右の行に対して、墨の量も変化します。周りに対しての部分であるということ、あまり形を意識してしまいがちです。一楽書道会では初代の深山龍洞先生の時から作品にある白は余白ではなくて必要な白だから要白なんだというふうに教えられています。だから字を書かないところを書きなさいと、ということは、白部分の形を描きなさい、ということだと思っんです」

大学を卒業と同時に一楽書芸院が発展的解散ということで笹波会と寒玉会と一東会に分かれ、それぞれが会の事務所を持つことになり、深瀬さんは一東会の事務所に入って仕事をすることになる。現会長が井茂圭洞先生で、ずっと神戸に本部事務所がある。

「ただ、三十歳手前で一旦辞めまして、高校や大学の非常勤講師やカルチャーの講師をしていました。四十歳過ぎて一東書道会で競書雑誌の編集をまかされることになり、戻って三十年ほどずっとやっています」

若いころに父の仕事で西宮に転居し、しばらく加古郡に住んで、結婚してからは神戸市内に、その後、加古郡に住むように



## Profile

(ふかせ ひろゆき)1952年、神戸市生まれ。小山素洞、井茂圭洞に師事。1976年、花園大学卒業。1984年、第16回日展初入選。2014年、改組新 第1回日展「念ひ」により特選受賞。2019年、改組新 第6回日展「名」により特選受賞。現在、日展会員。



「大和」2022年 第9回 日展





なった。東京や七尾まで指導のために通ったり、忙しい日々である。

**改組新第一回展で特選を**

日展との出会いについて何うと、初入選は一九八四年、第一六回日展で三十二歳のときであった。西行の歌を書いた。西行の中でも仏教思想の入った歌にひかれ、勉強を続けた。その後は通ったり通らなかつたりで、「関戸本古今集」はいちばん表現要素が多く、いろいろなことが身に着くと思っている。

その後、また転機が訪れる。五十歳の年から日展に出さなくなったのだ。それは師匠である小山先生が一東会から離れることになったためである。深瀬さんは悩んだが、競書の編集をひとりで行っていた責任もありそのまま残った。六年の月日が流れ、日展会場が国立新美術館に代わるときに、また日展に出すことになった。こうして十年間は、師の指導を受けることなくひとり書くことが続いた。

その後、小山先生が九十半ばになられ、お稽古ができない状態になっていることを聞いた。また日展に出し始めた深瀬さんに「書道が続けるならちゃんと勉強するように」と人を介してお言葉をいただいたという。その次の年の一月から、深瀬さんは井茂先生に入門することになる。

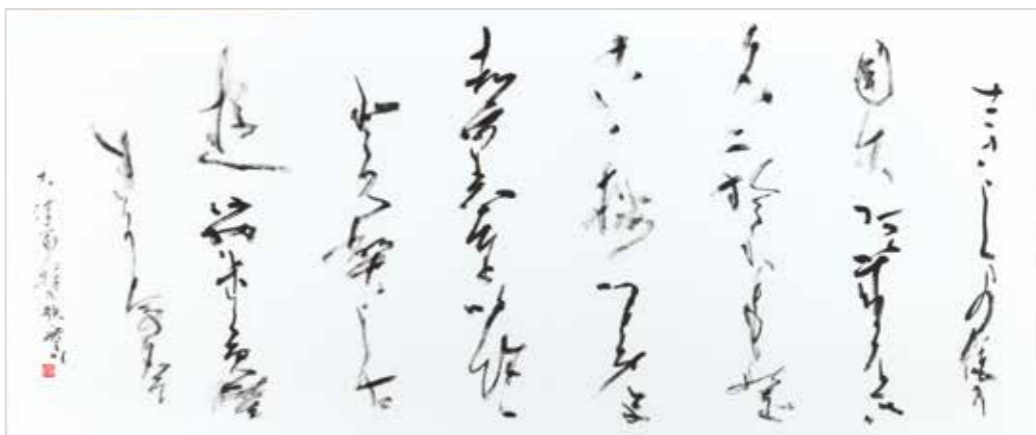
二〇一四年、改組新第一回展に万葉集

好きな歌を尋ねると、「あまり歌に思入れが強くなりすぎると、書はやっぱり目で見て表現する、目で見る造形物ですからその歌にあまりこだわらないですけれども、何か物語があれば、いわゆるモチベーションにはなりますね。」

制作過程については、「一枚書いたら目の前に貼って眺めることの方が多いですね。書いている時間より眺めて、あといろいろな古筆を引つ張り出して、その字面のところでどういう表現をしているかを調べたり、作品集も見ますし、何か参考になればというのが必要で、どうしても自分だけの感覚では行き詰まったら抜け出せない。どこかに助けを求めないと、それが古筆や先輩方の作品集であつたりします。」

書き出すまでの準備にも時間をかける。「万葉集でも歌を見て意味を調べたり、時には歴史の本を見たり、それからになりますから、でも、私の趣味みたいなもので、みなそうだとは思わないですが」

日展出品作については「日展に出される人は、とにかく一年がかりで日展の作品を仕上げると。だから日展がメインで、その時々の展覧会はそのための試作であつたりというようなことが多いように聞いています。日展の作品はみながレベル高いので、そういう気持ちで書かないとその時点でも負けてしまつてというふうによく聞きますから、本当はもう遅いんです。でもだいたいどんな作品というおぼろげなところは、



「名」2019年 改組新第6回 日展 特選



「念ひ」2014年 改組新第1回 日展 特選

の麻田陽春の和歌を書いて特選。その後、二〇一九年、改組新第六回日展でも「名」という作品で特選に輝いた。

こうして、毎年出品を続けるが、同じ歌を何遍か書いている、それは、画家も同じ題材を何度も描くことがあるのと同じであるという。書く時々で作品は変わっていく。たとえば、絵画からイメージして、全体の構成を北斎の波のフォルムに似せて書いてみたりも試みる。

「最終的にその古典の雰囲気ですべても書けるという風にするのが臨書の勉強だと思つていますので、平安調の古典は一字ずつ切り取ってバラバラにしたら、どの古典の字か分からないですよ。一字一字その形を真似しても私はそんなに勉強にならないと思つているので、作品を書く時にはその古筆を書いた人ならここはどう書くだろうかと思ひながら書くことはありますね」

その時、その時で自分にプラスになると思う古筆を選んで学ぶという。どのくらい勉強されるのだろうか。

「頭で分かっても何もならないので手が馴染むように、ということ。古筆によつて違いますし、一東書道会では、初代会長の深山先生が一つの古典を十年やれば、違う古典は三年徹底すれば十分だということなことを言われます。それだけ古典を学ぶノウハウを知っているの、古典が替わつてもそんなに年月を要しないということだと理解しています」

いつも日展会場の作品を見て、ちょっと目に留まった作品をヒントにしたいという作品が来年書けたらな、というぐらいは思つて、今度はこういうところを試したいというのがありますけどね。」

今後の抱負を尋ねた。

「区切りとして、筆の運びを変えたいと思つています。字の形を変えたところでそんなに変わるものでもない。ですから、筆の運びが一番それが根幹にあるのかなと、それによつて線が変わってきますし、線の出し方によつて必然的に字の形も変わると思つているので、ただやっぱり手に染み付いてますから、無意識で書くことと今までと同じ筆の運びで書いてしまふ。運筆の癖を矯正するのはちょっと時間がかかると思ふんですけど、それを直さないと作品自体は変わらないと思ふし、従来通りの作品をずっと書いていつかいいのかな、という気もしますから、今、こうやって会員にしていたら、あとはどうやってどこまで変わるかやってみるかな、という感じです」

いつも書かれる場所で歌を書いてくださった。流れる文字がとても美しい。「特徴としては画数の多い草仮名とか、あるいは漢字とかを使ってごまかしてると言つたらへんですけど作品はある部分ごまかしというところもあると思つているので、見た人がそう見えるように書くというのがあるの」と常に謙虚な言葉を返されるのだった。



# 理事長と語ろう！ 「芸術の力」



上野・桜木の日展会館にて。2023年8月



### Profile

宮田亮平(みやた りょうへい)1945年、新潟県生まれ。1970年、東京藝術大学美術学部工芸科卒業。同年、第2回日展初入選。1972年、東京藝術大学大学院美術研究科工芸(鍛金)専攻修了。1981年、第13回日展「ゲルからの移行[8]」により特選受賞。1997年、第29回日展「ぼーんぐ」により特選受賞。2005年、東京藝術大学学長。2009年、第41回日展「シュプリンゲン[悠]」により内閣総理大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「シュプリンゲン[翔]」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化庁長官。現在、日展理事長、日本芸術院会員、東京藝術大学名誉教授・顧問、国立工芸館・顧問。

日展第一〇回展を記念して、本年は高校・大学生の入場料が無料になる。そこで、芸術に興味がある中学・高校生が、今どのようなことを考え悩んでいるのか。宮田亮平理事長(78歳)を囲んで、座談会を開催。東京藝術大学卒業以来、教職、学長として東京藝大に関わり、文化庁長官を経て、昨年日展理事長に就任した宮田さんが、自らの高校時代や若き日を振り返りつつ、学生一人ひとりの悩みに、明解にわかりやすく答えを出していく。

宮田亮平 今日のは楽しみにしてきました。学生さんと僕との違いって何だと思えますか？ 単なる経験の違いなんです。人間が生きているということ、一日を過ごすか、夢を見るとか発信するとか、そういうことはむしろ若い方たちの方が想像力や情報力だとか持っている。僕は芸術家なんだけど、たまたまそれを生業にしているだけで、みなさんと変わらない人生を生活している。ぜひいろいろなことを聞いてもらえたら嬉しい。

基本、人間は心をときめかしたりドキッ

向けているスタンスというか、いつも作品を作る時にどう考えているか。ぜひ教えていただきたいです。



宮田 ないです。ないです。普段は全部芸術だから。例えば今日会うのはどんな子たちだろう、どんな難しいことをいって僕を困らせるの？ どんな風にして自分が喜ぶことになるの？ そういうことを巡らすのがまさしく芸術だ。芸術に定義はない。芸術に間違いはない。だから自由だ。でも自由というのは一番責任が重い。人のせいにはできない。だからその中で自分のこれが一番面白いんじゃないか。うまい、下手じゃない。いい悪いでもない。要するに自分に何かを課せるのではなくて、面白いの

宮田 僕が好きなのは、「よく見れば、なすな花咲く垣根かな」というのがあります。春やっとなすのそばに草がはえてきた。なすなすのは七草の一つで、もうぺんぺん草なんだよ。誰も見向きもしない、人知れず咲く花に気づける自分がなんて素敵なんだ

としたり、はったり、いろんな感情をもつ。だから、ああ素敵だったなって思えるようなきつかけ作りをしたい。今日はそういう意味でみんなが面白さを再発見するのが狙いなんだな。

君たちの年齢、十代後半は僕が一番迷った時期だね。今日はさまよっているあなたたちと同じ船に乗りた。ぜひ協力してくれないとだめだよ。

開成高校一年 山本大貴です。

宮田先生は長いこと芸術に触れられていると思うんですけど、その中で芸術に対して

ろう。そういう生き方だよ。展覧会に行くと、予測しなかったことに出会える。〇×の概念は捨てたほうがいい。ペーパーテストはしょうがない。でも生きていることは〇×のペーパーテストじゃない。もっともっと大事なことがいっぱいある。

### 芸術とは何か？

田園調布学園高等部二年の大竹菜月です。私も芸術に関係する道にこれから進もうと思っているんですが、最近は何も作らなから誰に向けてこの作品を作っているのかなと思います。宮田先生は自分に向けての方が大きいのか、その作品を見てくれる人を見て作りたいと思うのですか。



宮田 作ってなんぼ。作家はそんなもんじゃだめだ。人が喜んでくれてなんぼ。自分だけじゃない。もう一つ越えて、やっぱり自分がいいなと思うと同時にひと様もあ素敵ねって言ってくれるようになってくれば、どんなに素敵な自分になってるん





宮田 僕もね。書道は好きだったんですよ。僕は七人兄弟の末っ子なんですけど朝起きたら全員で、親も一緒に書道をする。何を書いてもよくて、書き終わったら掃除して、それからご飯を食べて学校に行くという習慣をつけてたんだね。幼稚園がないころ、好き勝手に書いてた。するとお袋が「昨日と違うね。今日の面白いね」と言ってくれる。「昨日と違う」、この一言がとっても大きかった。季節に合わせて、例えば冬になると「お餅つき」という字を書く。うまく書くかと思わないで面白く書く。書は絵画ですからね。

それが小学校三年なって。学校で習字の日があったの。そこで渡されるじゃない。お手本。あれ大っ嫌いだった。冗談じゃないよ。俺は俺の好きなものを書きたいと思っとうまく書いた。そしたら、いまだに恐怖があるんだけど、赤いやつ、嫌だよな。もうあれで真っ赤にされちゃう。ところがね、僕はまた自由に書く。でまた違う。真っ赤になる。三回くらいやったら先生に怒られちゃって耳引つ張られて廊下に出されたんだよね。本当に残念だったけど。

大会でうまくいかなかった時の財産になる。ああ、緊張してるなあ、これは財産だ。峠を越えると、もっと楽になるっていう気持ちでやっていってくださいね。

開成中学三年の森啓達です。先生は作品を作る時、どこで終わるかに意識されますか。



日展作品を鑑賞。

だろう。両方もっていくことができることまで行くことだね。

**制作や進路に迷ったときどうする？**

田園調布学園高等部二年 南水彩です。作品を作ることで思いが伝えられなくて迷うことはありますか。



宮田 めちゃくちゃ迷ってた。当然ですよ。だつてないものからあるものにしなきゃいけないわけだね。僕の場合は立体だから三次元をスケッチして二次元にする。横からもどっちからも見えるんだ。やっぱり最初のイメージと違ってくるわけよね。その迷いがいいんだよ。迷わずに作るんじゃない。迷った時の達成感みたいなものが得られる。でも大きな山へ登りたいと思わない。峠でいい。下るとき楽しんでしょ。そしてまたその次の峠へ行きたいと思いますね。むしろ助走だよ。それで次のところへ行く。これは迷いではなくて、次のステップのため

のウォーミングアップ。そんなつもりでいるから、迷った時って次の新しい作品を生むために神が与えてくれたチャンスなんだよ。そういう風に考えると、もう楽しいんだよ。振り返ったら峠を越えた作品になっている。これは芸術に限らず、人生の中でいろんなところにある家族の中の会話とかにもちゃんとある。

和洋国府台女子高等学校三年の山本珠貴です。美術系、デザイン系の進路を考えて高一の春から予備校にいらっしゃいますが、いろんな人と比べて、少し不安になっています。どうやって気持ちを持ち直したらいいですか。



宮田 いや懐かしい。僕は食えない時代、十何年も画塾の講師をやつた。比べるっていうのは考え方をちょっと変えてもらう。デザインということは平面構成だね。これだけ頑張つて作ったのに、先生はAさんのものをやたら褒めるんだよね。Bさん、あなたのことはあまり褒めなかつたりする。そういう連続つてあると思います。でも別

自分で満足してここで終わり決めて次の作品を作るのか、それとも足りないけど、ここでいいなと思つて終わるんですか。



宮田 時間つていう問題があるけど、ある程度作つていけると、もう次の作品を作りたいくなる。つまり、ここまで作つてこんなふうな感じになっているの、これで終わりにするんだ、とね。このドキドキ感を次の作品にまた持つていってより良いものを作りたい。これはもうすごい好循環だ。多分ミケランジェロやダ・ビンチにしても、これで終わりと思つたことがないんじゃないか。あえて止めたからこそ、次の作品に展開できる。一つのステップで、階段を上がつていけるといふ風に考えたらいいかがでしょう。そうするとね。すごく楽だった。前にこれできたというのは、その前にここで一つの自分の蓄積があったから。階段は上がりばっかりじゃなくて下るものもあるから両方あっていい。それにおいて成功とか失敗とかという風に考えない。僕らの仕事は常に間違いとかつていうことも考え

に比較することではなく、こういうアイデアもあるんだ。めつめた。へー。なるほど。もつとこ。そのくらいふてぶてしくいくと全然違う。

デザインで大事なことは、自分だけじゃなくて、それを使う人、見る人に喜びを与えること。世の中がどう動くか、知っておいた方がいいね。その知識は大事にもつていれること。でも知識だけだとパンクするからうまく応用するときに知恵となる。知識が豊富でありながら知恵を生かしていくと考えると、けっこうかっこよくなる。あとはちょっとしたコツですね。画面の中に必ず主役と脇役を置きます。それで一番面白いのは平面の世界とすると囲碁将棋はまさしくデザイン。どこに一手をうつか。親からもらったかっこよさと自分で作ったかっこよさを持つていけるのがいい。

和洋国府台女子高等学校二年の清水咲姫子です。書道をやつていて、書の大会直前になると不安になったり焦つたりします。どうすればよいですか。



なくていい。難しく考えないということやってきてね。

僕は大臣から文化庁長官に任命される時、「文化庁長官をやります。でも芸術家は辞めません」って言ったんだよね。それ言つたら周りがざわめいちゃつてさ、大臣が「いいね」と言った。

「今よりちょっとすてきな」、そこがものすごく大事だ。昨日とちょっと違うというのを積み重ねていく。たとえば。ここにあるイルカの作品の前はほぼ似たようなフォルムだけど、イルカの群れがこの辺に固まっていた。大きな波の中でしっかりと守られてた。次にこれは長官を辞めた年の春の作品で、イルカが飛び出していく形に表した。哲学的な作品ももちろんいろいろ。僕はその時の一番素直な気持ちを形に表した。今度作る秋の作品はもっと大きな波に挑戦したい。もうフリーになつたから、それで多分こけると思ふんだよ。こけた時の面白さをやってみたかった。すごい波作つてるんだよ。悩むんだけど、面白い。

今日はみんなのエネルギーをもらったからこれ終わつたら早くアトリエ行って、それを作品に表したい。人生の物語で出会いたいものを作品の題材にしたいと思う。

**将来に向けて準備しておくべきことは？**

開成中学の森です。僕は車が好きで、車の





藝大専攻時代の映像を鑑賞。

デザイナーになりたい、できれば海外のメーカーで働きたいなど思っていて、それを目指す上で、言語以外で美術的な分野とかで何かしておくべきことはどういうことでしょうか。

宮田 僕も実は車のデザイナーになりたい。今なりたかったとは言っていないでしょ。いまだにしたい。なぜ鍛金家になったかというところ、ボディを叩いて作る車のデザイナーになって、これが鍛金で作れたら面白いなと思っただよ。その技術を勉強してからデザイナーの会社に勤めていいと思っただよ。てたら未だにそのままなんだよ。

昔の車は時代に合わせてとても素敵だったよ。ロンドンタクシーを今ジャパンタクシーっていう風にしてるじゃない。例えばフェラーリや、ランボルギーニとか、スーパーカー的なものがあるけれど、クラシックカーは乗りやすいよね。見た目のカッコよさではなくて、人間工学的にかっこいい座りやすいシートになってますよ。乳母車もスッと入る。前ばかり見るんじゃないで、後ろもちゃんとニーズにどう答えるか。

語学なんてものは当然やってくださいね。それがないと伝わらない。それから自分からの発信、人からの受信っていう関係がないとね。そのためには早めに海外行くのもいいか

もしないね。好みもあるでしょうけれども、ヨーロッパ環境だったら勉強しやすい。イタリアにしてもそうです。ドイツ車は質実剛健だし。まあ、僕も大した留学経験はないけれどドイツのアウトバーンでは200キロが普通だからね。自分で運転してちょっとこの車、くやしんだけどいいねと思っただよ。もう四十年前の話ですが。あとはそのニーズ。周りの環境にどうマッチするか、社会性を勉強することが大事。ぜひかっこいいデザイナーになって会おうよ。あんまり足かせにならないでひとつの目的をもってね。

和洋国府台女子高等学校の清水です。私は将来、書道の先生になろうと思っただよ。ですけど、本当に書道の先生でいいかなと悩んでいます。宮田先生の学生時代はいかがでしたか。

宮田 結果的には僕もあれやりたい、これやりたいで大学に入った時は工業デザイナーになりました。悩むのは大したことではない。迷うのは自分に未来があるからだよ。だから、それはとても素敵なことだと自分に言い聞かせていたたら大丈夫だと思っただよ。どんどんどんどん前向きに進んでいけば目的ってかなうと思う。でも教えるという感覚でなくて、共に学ぶ、共に育むっていう気持ちや意識があると思っただよ。いぶん違うんじゃないかな。どうぞ自信を

持つて素敵な自分でやってください。欠点をどうこう言われる時って必ずあると思うんですけど、あまりそれに動揺しないほうがいい。それはあくまでも今は成長過程の中で栄養剤をくれるんだっていう気持ちで考えたらいいな。楽しみにしています。

和洋国府台女子高等学校の山本です。先生の藝大時代の話が聞きたくて、大学はいろんな人がいるじゃないですか。やっぱりこの人はすごいなとか。その感動はすごいですか？

宮田 僕は藝大に二浪で入って、ちょっと早すぎちゃった。四浪か五浪くらいがちょうどいいな。いやいや、今の話じゃない。僕の時で、十何浪ってやつがいた。純粋に基礎力をきちんと学んだ上で応用力がついてくるみたい。もうゴロゴロいましたよ。周りに。かなわない。その中にいるって最高に幸せだもんね。こんないいことないよ。さっきも言ったけど。そういう人たちからもらえばいいんだから。「いや、いいな。お前大好きだよ。お前の作品、大好きだよ」って。嫌いというのと両方あっていい。そうすると自分の存在ってどこにあるのかだんだん分かってくる。粘土を右側から、左側から固めていくように。要するに固めていく。そうして独立していくわけです。そうして積み上げていく。片方はかりやっていると倒れてしまう。両方やるか

ら一つの形ができる。いろんな人がいたけれど、そんなもんね。こう感じるなかで自分のエキスを。だから浪人というのは遠回りかもしれないですが、そんなことない。浪人って具体的な問題じゃなくて、いろんなことだね。ちょっと遠回りしてるかな。少し自分は周りから見ると、知ってるかなと思うのが、財産です。僕がたまたま学長やったとかね。長官やったとか、いろいろあるかもしれないけど、それは後からついてくる。なんだそうだったんか。の感じなんだよ。のつけなんて皆同じなんだから、ものを作ろうとする財産、むしろあなたがたは柔軟でエネルギーを持ってる。

田園調布学園高等部の南です。私は海外に興味があって、外国人の方とお話ししたりすることがあるんですけど、そういうときに日本の伝統文化や美術について語る上で、その誇るべき点とか特徴みたいなのを教えていただきたいです。

宮田 いいね。あのね、たとえばある所に招かれたとして、そこにいい絵が掛かっている。ふっと見て、「これは何とかの作品ですね」と言える知識力ですね。あなたを歓迎するものが置かれてることが多いので、それにきちんと反応したりすると会話もものすごく深くなる。特に日本の文化に関して、いろんな戦乱があっても途切れる



ことなくずっと続いてきたその文化力っていうのは、日本人がもっている本場にすごいもの。数百年ずっと変わらな残っている。日本のすばらしさを感じて自分が誇れる日本人であること。いろんなもの、本物を見に行くといね。皇居の中の三の丸尚蔵館には皇室に献上したものがあ。それを、今もって公開しようとしています。石で作ったものではなくて、土だとか紙だとか、木だとか割に傷いもので作ってもきちっと過去から未来につなげていくという、文化財の保存技術も含めて日本のすばらしさがある。そういうものを感じていく。例えば私は絵がいいなと思う。したら、源氏物語絵巻から持ってきて鳥獣戯画、北斎もつてきてというふうにながら現在の作家の作品へ脈絡をつなげていくと、物語性ができて面白い。陶器なら陶器、彫刻なら彫刻、専門にしている工芸。例えば、楽焼き。楽さんという人がいるのですが、十五代前から全部作品が残っている。面白いよ。茶道のお手前の席で、季節に合わせて俳句や歌の話を。例えば道元というお坊さんは、四季を詠っていた。「春は花、夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり」。花、鳥、月、雪、の四つに色が混じっている。そこから感じられるものがあるじゃないですか。僕はそこから立体的な意識を感じるし、季節や香りを感じるし、いろんなものを感。そのところを、ちょっと勉強するのは。例えば食の素晴らし

さ。日本は島国で新鮮な魚が捕れる。魚だけだと食えないけれど、そこに醸造された醤油を添える。その新鮮さと醸造、いわゆる「過去」と「現在」を重ねると食べたときに「未来」を感じるっていう風に「重ね技」でいくことができるのが日本人の美しさの中の一つとしてはある。いろんなところで絡め技をする面白。それで間違いないから、のつけに言いましたけど、間違えや失敗はないんだよ。

AIや、漫画の意味とは？

田園調布学園高等部の大竹です。最近、絵を描くAIが出現してきて。私たちが一つの作品を作るのに何十時間かかるけれどAIはボタンを押せば一瞬で完成する。そうした中で人間が絵を描いたり、モノづくりをする意味は何なのでしょう。

宮田 僕はAI大好き、省略できることはAIにまかせればいい。過去のデータが来たらそれをポンと持っていて、そこに自分の感性を入れると新しいのができちゃう。その場合は膨大な時間のものを一気に縮小してくれるわけだ。でもそのまま作品にしちゃうだけ。それをみな勘違いする。刺身ができる前には漁師さんが苦労して捕ってきてっていういろんな過程、情報があるわけじゃないですか。それを全部わかつたうえで必ず人間の感性が入って





日展はどんなところ？

田園調布学園高等部の大竹です。日展の審査基準についてですが、絵って人によってはいって思っても、違う人はいや、これは悪いって、いろんな見方があるじゃないですか。その中でどうやって審査しているのでしょうか。

宮田 答えは難しいと思います。ただやはり大事なことは、人の心に触れる、感じさせてくれる、発信されていく力がどのくらいあるかということに、その作品の良しの基準があると思う。同時に日展は審査員を絶対毎年同じ人にさせないんです。同じ人が審査すると自分の好みのものだけの展覧会になってしまう。それは一切避けて、二十人弱の先生方が厳正に審査をしている。その中で過半数をとったり、工芸の場合は五審、六審くらいまであるんです。そういうふうにして徐々にいろんな人の考え方を語り、「この作品はここがいいんです。」とか、気づかなかったな」とかね。そういう会話をしながら作品を評価していくと自然に残っていく。それはとても気持ちよく誇れること。自分自身のことを考えても賞をもらった作品というのはいまだにやっぱり嬉しいよね。

そのきっかけ作りになるのが芸術の仕事であるし、芸術を鑑賞する素晴らしさと、自分自身が芸術家になって人々に喜びを与えるというのも大事だと思うんです。僕はその喜びを与えるという仕事と同時に、自分自身が喜びたいというのがあります。ぜひ皆さん、芸術に触れて、新たな自分を探してあげてください。あるいは宝探しをして、それで素敵な自分の洞察力を磨く原点になればとても嬉しいかな、というような気がしています。

僕はまだイルカも作りませんが、それ以外でも人様に喜びを与えることができる仕事をしたい。結構パブリックアートの仕事もしているので、時々見てください。秋の日展で、この作品ができたというのをぜひ見てください。お互いに勝負だからね。お互いにこんな作ってみたいってやったらいいんじゃないですか。今日は本当にありがとうございます。いい出会いで、楽しかった。ありがとう。

学生一同 ありがとうございます。

ると面白いと思う。そしてまた次の作品を作る。否定しなくていい。藝大で文化財保存の一番古いものの仕事をやっている学科がある。あえてそこでAIをどんどん使って、クローン文化財を作った。否定しないで大いに利用してください。たとえばゴッホの自画像ってあるでしょ。藝大ではゴッホが描けない後姿を描いてるんだよ。データが全部あるから、後ろも描けるわけよ。それをバカだなと思うかどうか、利用の仕方によってはこんなことができる。

開成高校の山本です。

僕はいわゆる芸術といったときにイメージされるものはちよつと違って最近のポピュラーなイラストやアニメによく触れたいりしてんですけど。そういうのも、今までの積み重ねとかあった上で、そこに存在しているのでしょうか。一貫している何かってあるんでしょうか。

宮田 僕は漫画を本当に尊敬しててね。あの人がちよつといよ。こちらは一枚の絵を描くのにひーひー言っているのに。それを物語として一週間に一話出しているじゃない、あんなすかさずって考えられない。もちろん編集者やいろんな人の協力があるのだからけれども、もつと振り返れば、例えば鳥獣戯画だとか、北斎だとか源氏物語絵巻とか、そういう絵物語。まだ文字が読めない頃のアルタミラの壁画には牛とか人の絵がある。

開成高校の山本です。日展の理事長はどういう感じで展覧会に関わる仕事なんですか。

宮田 一番恐ろしい質問だね。なるほど理事長として日展に関わる。これは予想だにできなかったわけだから最初は相当戸惑いました。ものすごい歴史があるし、大変な日本の文化を作ってきた日展ですから、一五年を過ぎていくわけですから、どれだけの人たちが文化に対して貢献してきたかというものを背負うのは大変なことですよ。また、改組されて今年が一〇回目になる。新たな一〇回目。一つの歴史を作っていく。だからもう背負うだけ背負って、わかったって言ったなら、次にもう「おいらの日展、あなたの日展、みんなの日展」という感じでやっていきたい。そこで日展においてになった方に必ず喜びを提供できる自信を僕は持っている。なぜかという僕の作品もそうだけど、他の先生方もみんなその気持ちで作ってくれた作品が集合しているから、だから自慢できる。厳正に審査されている作品が並んでいる。当然そこで大きな感動を与えるものというのがある。膨大な作品の数がありますから選ぶ面白さがある。「宝物」を選ぶ面白さです。日展をまず、一回ザッととなく見てもらう。それである作品の前に立ち止まったりする。それって自分の感性と結びつくんだよ。それで、もう一回見る。違う作品をまたまた見つけたりする。前より、もつと感動した

例えば国宝の銅鐸の中には人が穀物を耕したり狩りをしたりしている絵がある。物表現する伝える力っていうのがすごくあるんだよ。そしてもう一つ日本人には謙虚っていう美学があるんだよ。言わずもがなと言いつつ伝えていくこととする。そういう美しさがある。その両方を持っている。だからそこってすごいことだなと思っている。僕は漫画とかアニメとか新たな世界観と言いつつやはりちゃんと伝承されてきている、人間の中のDNA力があるんじゃないのかな。その中にはただうまいだけでなくて、物語性もある。だから入るんだよ。また漫画の最後に出てくる「つづく」。ここで終わるのか次なんだろうみたいな、あれも素晴らしい芸術力だった。芸術の力って、何かといたら、人の心を高揚させるビタミン剤。なくてもいいんだよ。でも、なくちゃいけないっていう感じがちよつとある。

例えばあそこね、「藝の城」という書がある。芸術の藝という字が表しているのは人がしゃがんで、手で穀物を捧げ持つての姿。捧げ持つのは自分の感情でもいい。人に心を捧げる。それが美しさなんだよ。それが藝なんだっていう字の根源なんだよ。書ってすごいんだよ。芸術ってすごいんだよ。そういうものを感じる。

漫画も素晴らしいものだと、おおいに自信を持って誇りに思ってください。

りする。そういう面白さ、宝探しだ。そういう風に見ていくのが面白いと思うんだ。理事長職をいただいたので、もう全部門の審査にも立ち会わせてもらったし、気づかなかったことに気づかせてくれた面白さというのがあった。それから、今日のようにあなた達に会えたというのは、こんな嬉しいことはない。だって、絶対、これから確実に伸びていくわけだから。僕が大好きなのは、師の言葉という、「弟子は師を越えてこそ師の教育原理が出来上がってくる」。いいですか。もうあなた達は今日から私を越える。たいしたことないよ。ぜひ楽しみにしてます。負けないけどね。お互いにね。いい意味で人と競うこと、自分に負けない素敵な自分を作る。それがどんなかたちになってもかまいません。芸術であろうと他の世界であろうと一家庭を築くことであろうと、その中に一輪の花を添えたり、素晴らしい未来を作っていくってください。

芸術って何のためにあるんだろうと云ったら僕はビタミン剤だという話をしたけど、ビタミン剤って単なる栄養剤で活力源ではないんだけど、その原点になるものだから大事にしている。例えば朝起きて顔を洗って鏡を見たときに「昨日と違う俺がいるな」っていつも感じたいよね。それが生きる喜びの原点。それでその日一日を送る。それが積み重なっていった時に素敵な人生が送れると思うんですよ。



## 講演会・シンポジウム・映像による作品解説

○場所:国立新美術館3階講堂(入場無料)  
 ※各日、講堂前にて整理券をお配りします。(30分前～)  
 ※途中10分休憩



開催日	時間	講演会・シンポジウム・映像による作品解説等	司会(進行)
11月4日(土)	午後 1:30 ～ 3:30	[日本画] ○映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者(大臣賞・都知事賞・会員賞・特選) 今年度新入選者 ○今年度審査員と新入選者による座談会 -登壇審査員が選定した作品を解説- 今年度審査員	
11月10日(金)	午後 1:30 ～ 3:30	[彫刻] ○「ぶらっと彫刻を楽しむ」 第1部 日展編 第10回日展の見どころ 今年度審査員 第2部 地元へ愛される彫刻(西日本編) 田丸 稔 吉居寛子 白石恵里 第3部 彫刻が楽しめる美術館編	寺山三佳 中原篤徳
11月11日(土)	午後 1:00 ～ 2:30	[洋画] ○今年度審査主任と特選受賞者による座談会 ○今年度審査員と新入選者による座談会	石田宗之 大友義博
11月18日(土)	午後 2:00 ～ 3:30	[特別対談] ○デザイナー コシノジュンコ氏×宮田亮平理事長	
11月23日(木・祝)	午後 1:30 ～ 3:30	[工芸美術] ○シンポジウム「伝承と発信」 今年度審査員	
11月25日(土)	午後 1:30 ～ 3:30	[書] ○シンポジウムによる討論会「日展の書」 森嶋隆鳳 木村通子 綿引滔天 大橋洋之 川合玄鳳 ○映像による作品解説「書」 松清秀仙 倉橋奇艸 岡野楠亭	牛窪梧十 井上清雅

### 報道関係お問い合わせ

ご取材、写真申し込みなどは  
右記までお願いいたします。

日展プレスオフィス  
 TEL. 03-6312-4098 / 03-5786-4650 FAX. 03-6862-6727  
 MAIL sr@mbr.nifty.com  
 〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

## わくわくワークショップ

小・中学生とその保護者を対象に、日展作家の指導のもと、  
各科のワークショップを行います。各回約2時間



実施日程	時間	部門(希望する部門を選択)
11月5日(日)	午前 10:30～ 午後 2:00～	日本画 洋画 書 彫刻 工芸美術(漆)
11月12日(日)	午前 10:30～ 午後 2:00～	日本画 洋画 書 彫刻 工芸美術(陶芸)
11月19日(日)	午前 10:30～ 午後 2:00～	日本画 洋画 書 彫刻 工芸美術(金工)

◎親子で記憶に残る  
体験をしてみませんか!

- 日展作家が直接指導します。
- 対象:小・中学生とその保護者  
(参加費は無料、保護者は入場券を各自ご用意ください。)
- 場所:国立新美術館3階講堂
- 申込受付:ハガキかFAX、又はメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・学年・人数・希望日・希望部門(※第2希望まで)を明記のうえ、下記までお申し込みください。申し込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。(受付締切 10/27 必着)
- 受付人数:各部門5組(10名程度)

### 「お申し込み・お問い合わせ」

110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1 日展事務局・わくわくワークショップ係  
 TEL.03-3823-5701 FAX.03-3823-0453 E-mail event@nitten.or.jp

## らくらく鑑賞会

出品作家達と一緒にゆっくり日展を鑑賞したい方に

- 開催日程: 11月6日(月)・13日(月)・20日(月)
- 定員: 各回10～15名
- 参加費: 1名5,500円(入場料、昼食、テキスト他)
- 時間: 10:30集合、16:10解散(昼食つき)
- ※予約制(詳細は下記日展事務局までお問い合わせください。)

## ミニ解説会

会期中の平日開催 一人からでも解説が受けられる

- 開催日程: 第10回日展会期中の平日  
(土・日・祝日・初日・11/10を除く)  
午後1時30分～(30分程度)
- 定員: 各部門20名(5部門)  
※参加費無料 各自入場券をご用意ください。  
※予約制(当日受付あり)

## グループ作品解説

- 平日(月～金)に15名前後の団体が作品解説をご希望の方に
- 日展作家が会場をご案内いたします。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書のいずれか1部門をお選びいただき、約1時間で主要作品をご説明いたします。ご希望のグループは、事前にご予約ください。
- 校外学習やクラブ活動など、学校のグループにも学年や目的に応じた解説をいたしますので、ご相談ください。

## 「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品(彫刻一部の作品)に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。



## 日展の特徴とみどころ

日展では、切磋琢磨された日本の現代作家の作品、しかも5部門のジャンルの新作 3,000 点が一堂に会します。エネルギーに満ちた会場で、新たな日本の美術との出会いをお楽しみいただけます。

### 日展は5部門がそろって、世界でも類をみない総合的な公募展

5つの部門〔日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書〕の作家が年に1度、日展のために制作した新作が揃う、世界でも類をみない総合的な公募展。

### 今年設立116年目の美術団体

明治40年から続く今年116年目の美術展。日本最大級の公募展で、歴史的にも、東山魁夷、藤島武二、朝倉文夫、板谷波山、青山杉雨など、多くの著名な作家を生み出してきました。

### 日本最大級の公募展

昨年の応募者数は11,186点で、入選者と無鑑査作品、合計2,979点の作品を展示しました。

### 日本の芸術家の渾身の最新作が集結

展示された作品は作家の今を写す鏡ともいえます。作品から世相や背景など多くのことを読み取る楽しさがあります。また、伝統的なスタイルの作品から現代的な作品まで、テーマもジャンルも幅広い作風をご覧ください。

文化勲章受章者の中村晋也（彫刻）、大樋年朗（陶芸）、奥田小由女（人形）、文化功労者の尾崎邑鵬（書）、井茂圭洞（書）、森野泰明（陶芸）、中井貞次（染色）などの作品も展示。日本の美術界を代表する作家たちの現在の作品をご覧ください。

### 全国の日展作家がバックアップし、鑑賞を深めるイベントを開催

鑑賞の理解を深めるイベントを開催。第10回日展では、各部門ごとの講演会、シンポジウム、作品解説を行うほか、日展作家から学ぶワークショップや作家に手紙を書くワークショップなどを開催いたします。詳細はP60-61をご覧ください。

## 日展について [参考資料]

### 公募展とは

これまで公募展が発展したのは、日本では作家は公募展に出て世に認められていくことが多く、団体の中で競い合い切磋琢磨することですぐれた芸術作品を生み出してきたという伝統があります。

### 日展は

日展は、日本に400ほどある公募展団体のなかでも最も大きく、毎年秋に「日本画」「洋画」「彫刻」「工芸美術」「書」の5部門と一緒に展覧会を行います。応募者のなかから、入選や特選が選ばれ、無鑑査出品の作品と並んで陳列されます。応募者は10代後半から100歳を超える方までさまざまです。会場に並ぶ作品点数は3,000を越えます。

### 1部門につき1人1点応募できる10月に搬入後、審査

毎年10月、指定の期日、場所に作品を搬入し、日展審査員が審査を行い、入選か否かが決定されます。昨年は11,186点の応募があり、2,309点が入選しており、全体では21パーセントが入選となりました。科ごとに見ると、日本画が339点のうち入選154点、洋画1,575点のうち入選が547点、彫刻85点のうち66点が入選、工芸美術611点のうち454点が入選、中でも書は8,576点のうち1,088点が入選で13パーセントと最も狭き門になっています。なお、昨年の新入選点数は全体で296点でした。

### 日展の5つの芸術ジャンル

- [日本画] 日本の伝統的な絵画で、絹や紙に天然の鉱物を使った「岩絵の具」で描かれます。
- [洋画] キャンバス（布）に油絵の具で描く油彩画のほか、水彩画、版画があります。
- [彫刻] 人や動物などの形を石や木を彫ったり（彫像）、粘土を固めたり（塑像）して作ります。
- [工芸美術] 実用品に美しさや装飾性を加えて作られた作品で、陶磁器、漆、染色、彫金などさまざまな種類があります。
- [書] 漢字、かな、調和体、石などに文字を彫り押し印する「篆刻」があります。

### 日展が輩出した芸術家たち

明治、大正、昭和、平成へと、こうした芸術家たちも日展で活躍し、近代日本美術の発展に寄与してきました。

- [日本画] 中村岳陵、福田平八郎、杉山寧、東山魁夷、奥田元宋、佐藤太清、高山辰雄、大山忠作、鈴木竹柏
- [洋画] 藤島武二、和田英作、白滝幾之助、棟方志功、小山敬三、井手宣通、國領経郎、伊藤清永、森田茂
- [彫刻] 高村光雲、朝倉文夫、清水多嘉示、北村西望、澤田政廣、圓錐勝三、富永直樹、橋本堅太郎
- [工芸美術] 板谷波山、山崎覚太郎、楠部彌次、帖佐美行、高橋節郎、青木龍山、蓮田修吾郎、三谷吾一、今井政之
- [書] 日比野五鳳、青山杉雨、金子鷗亭、村上三島、小林斗盞、杉岡華邨、高木聖鶴、小山やす子、日比野光鳳





## 日展とは

日展は、その前身である文展（文部省美術展覧会）の創設から今年116年目を迎える伝統ある美術団体です。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と5つの部門からなり、世界でも類をみない総合美術展としてほぼ毎年開催され、全国の多くの美術ファンを集めています。その歴史をさかのぼれば、江戸時代の長い鎖国の後、日本は産業の育成と同時に芸術文化のレベルアップの必要性を感じていました。文部大臣の牧野伸顕は、オーストリア大使時代より日本の美術の水準を高めたいという夢を抱いており、1906年に念願の公設展開催を決め、1907年に「文展」が開催されました。その後、文展は「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ日本の美術界の中核として、116年の歴史を刻んでいます。当初は日本画、洋画、彫

刻の三部門でしたが、1927年に工芸美術、1948年に書が加わり総合美術展となりました。1958年より民間団体として社団法人日展を設立。69年に改組が行われ、2012年からは公益社団法人となりました。

日展は、毎年10月に作品公募を行います。昨年日展の応募点数は11,186点で、そのうち入選は2,309点、日展会員の作品など670点を合わせ、計2,979点が展示されました。今年も、約3,000点の作品が3週間にわたり、六本木の国立新美術館で展示され、その後、京都、名古屋、神戸、金沢と4会場を巡回する予定です。現代を生きる、日本の最高レベルの作家の新作3,000点が一堂に会す日展。熱気あふれる会場から日本の美のいまを体感ください。



### 報道関係お問い合わせ

ご取材、写真申し込みなどは  
右記までお願いいたします。

日展プレスオフィス  
TEL. 03-6312-4098 / 03-5786-4650 FAX. 03-6862-6727  
MAIL sr@mbr.nifty.com  
〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20南青山コンパウンド502

## 展覧会概要

日展は、明治40年の第1回文展より数えて、今年116年を迎えました。今年も11月3日（金・祝）～11月26日（日）まで、国立新美術館にて第10回日展を開催いたします。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたり、全国各地から応募された作品の入選者ならびに日展会員、準会員、前年度特選受賞者の作品約3000点が一堂に会し、幅広いジャンルの現代の芸術作品をご覧いただけます。また、第10回展を記念しまして、高校生・大学生は無料となります。東京展の後は、京都、名古屋、神戸、金沢の4か所を巡回いたします。

展覧会名	第10回 日本美術展覧会
英文名	The 10th NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition
会期	2023年11月3日（金・祝）～11月26日（日） 〔休館日〕火曜日 〔観覧時間〕午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）
会場	国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2 東京メトロ千代田線乃木坂駅直結 都営大江戸線 六本木駅 7 出口徒歩約4分 東京メトロ日比谷線六本木駅4a 出口徒歩約5分
主催	公益社団法人日展
後援	文化庁／東京都
入場料	一般



当日券	1,400円
前売券・団体券（予約制）	1,200円（前売販売期間10/1～11/2）

○第10回展記念として、**学生（高校生・大学生）は無料**。入り口で学生証の提示をいただきます。○小・中学生は無料。  
○団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚を進呈。○前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、ファミリーマート店内Famiポート、CNプレイガイドほか、主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店などで発売。（前売券販売期間：10月1日～11月2日）○日展ウェブサイトからもご購入いただけます。\*チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/>でご確認ください。

**お得なチケット** ○**ペアチケット**（前売りコンピューターチケットのみ）  
1枚2,200円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方に、お得なチケットです。他の割引との併用はできません。（販売期間は前売券と同じ）  
○**トワイライトチケット**（時間限定入場券・会場窓口販売）  
観覧時間：午後4時～午後6時／入場料：一般500円  
・チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/>でご確認下さい。

一般  
お問い合わせ 日展事務局 TEL. 03-3823-5701

### 巡回展（予定）

京都	令和5年12月23日～令和6年1月20日	京都市京セラ美術館
名古屋	令和6年1月24日～2月11日	愛知県美術館ギャラリー
神戸	令和6年2月17日～3月24日	神戸ゆかりの美術館 神戸ファッション美術館
金沢	令和6年6月1日～6月23日	石川県立美術館



